

名古屋城調査研究報告2
埋蔵文化財調査報告書2

名古屋城二之丸地区試掘調査報告書

第1次・第2次調査

2021

名 古 屋 市

例 言

- 1 本書は、名古屋市中区二の丸に所在する特別史跡名古屋城跡の未告示地区で実施した試掘調査の報告書である。
- 2 試掘調査は名古屋城二の丸の遺構残存状況確認のため、平成30年度と令和元年度に実施した。調査体制については第1章第2節で示している。調査に伴う排土工事は岩間造園株式会社、測量は株式会社イビソクが2年度共に行った。
- 3 調査面積および調査期間は以下のとおりである。
第1次調査：面積 40㎡
調査期間 平成31年1月28日から2月28日
第2次調査：面積 40㎡
調査期間 令和元年9月6日から9月20日
- 4 本書の執筆は、第1章第2節、第2章第2節、第3章第1節、第2節(9)(12)、第3節の一部を花木が、第2章第1節は高橋、それ以外を佐藤が担当した。編集は佐藤が行った。
- 5 調査の記録、出土遺物等は名古屋城調査研究センターが保管している。
- 6 現地調査、出土遺物に関しては次の方々にご教示、ご協力を頂いた。
後藤泰男、水野信太郎、舞鶴赤レンガ資料館
水野氏からのご教示は舞鶴赤レンガ資料館を通じて頂いた。

凡 例

- 1 調査および本書における座標系は世界測地系第7系を、標高は東京湾平均海面(TP)を使用した。
- 2 本書における土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』2007年版による。
- 3 本書での図版の縮尺は、遺物実測図は原則1/3である。その他の縮尺を使用する場合は図面下に縮尺を記した。
- 4 本書での写真図版の縮尺は任意である。
- 5 遺構記号は、『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』(奈良文化財研究所編 2016)に従い、次の記号で表記した。溝(SD)、土坑(SK)、柱穴・ピット(SP)、礎石(SS)、その他(SX)。

目 次

例言	
凡例	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 実施体制	2
第2章 周辺環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査成果	6
第1節 周辺の調査	6
第2節 遺構	8
第1項 調査の概要	8
(1) 平成30年度の試掘調査	8
(2) トレンチ1	8
(3) トレンチ2	8
(4) トレンチ3	13
(5) トレンチ4	15
(6) トレンチ5	17
(7) 令和元年度の試掘調査	19
(8) トレンチ6	19
(9) トレンチ7	19
(10) トレンチ8	22
(11) トレンチ9	25
(12) トレンチ10	25
第3節 出土遺物	27
第4章 総括	38
写真図版	41
報告書抄録	

第1章 調査の概要

第1節 調査にいたる経緯

この報告書でいう「二之丸地区」は名古屋城二之丸のうち名勝名古屋城二之丸庭園の指定域を除く、国の特別史跡名古屋城跡の未告示地区である(図1)。名古屋城二之丸は昭和7(1932)年、名古屋城が国の史蹟に指定された際に陸軍が駐屯していたため、指定から除外されていた。戦後、昭和27年に文化財保護法の基、名古屋城が特別史跡に指定替えされた折にも二之丸は特別史跡の指定域に含まれることはなかった。その後、昭和52年には名古屋城二之丸について国の文化財保護審議会は文部大臣(現文部科学大臣)に特別史跡に追加すべき箇所として答申を出したが、告示されることなく現在に至っている。

今回の試掘調査の対象となった二之丸地区は主に二之丸の北に位置する二之丸広場と南の愛知県体育館(以下、県体育館と略する。)周辺、及びこの両者に挟まれた園路、植込み等がある地域にあたる。愛知県が管理する県体育館はかねてより特別史跡に直接関係のない施設であることが指摘されており¹⁾、加えて老化による移転が具体的に取りざたされるようになった²⁾。それらを受けて県体育館移転後の二之丸地区の活用を見据え、二之丸地区の保存活用に関わる基本構想を検討するための基礎調査として、平成30年度から試掘調査が開始された。

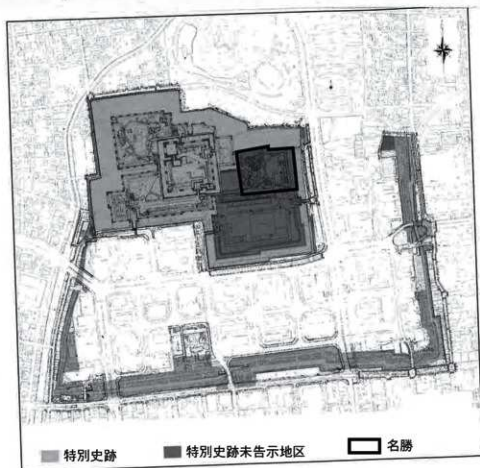


図1 特別史跡・名勝指定範囲(『特別史跡名古屋城保存活用計画』名古屋市2018)

第2節 実施体制

試掘調査は平成30年度（第1次）と令和元年度（第2次）に実施した。

今回の試掘調査は特別史跡の未告示地区内での調査であるために、特別史跡における現状変更許可申請に準じた扱いとし、名古屋市教育委員会文化財保護室へ協議書を提出し調査を実施した。

調査にあたっては、特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議庭園部会（以下、庭園部会と呼称。）の指導・助言を受け、文化庁、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会等の関係諸機関の協力を得て実施した。特に平成30年度は調査体制等の諸事情により名古屋市教育委員会の協力を仰いだ。

庭園部会の構成員は下記のとおりである。

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議庭園部会（平成30年度、令和元年度所属等は各年度当時）

座 長：丸山 宏 名城大学教授
 副 座 長：仲 隆裕 京都造形学芸大学教授
 構 成 員：栗野 隆 東京農業大学准教授
 高橋知奈津 奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室研究員
 オブザーバー：平澤 毅 文化庁文化財第二課主任文化財調査官
 洲崎 和宏 愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室長補佐
 野村 勘治 有限会社野村庭園研究所
 白根 孝胤 中京大学教授
 事 務 局：名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所
 名古屋市緑政土木局緑地部緑地管理課
 名古屋市教育委員会生涯学習部文化財保護室

表1 試掘調査体制

調査次	調査年度	調査期間	調査区	調査担当
1次	平成30年度	平成31年1月28日～2月28日	T-1～T-5	佐藤公保 野澤則幸（名古屋市教育委員会文化財保護室）
2次	令和元年度	令和元年9月6日～9月20日	T-6～T-10	佐藤公保 木村有作 花木ゆき乃 二橋慶太郎 古田成美

注1 「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」名古屋市 2018

注2 令和元年6月11日付朝刊「中日新聞」他。

新体育館が令和7年（2025）に供用開始と報道されている。

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

名古屋市は、濃尾平野の東に位置し、伊勢湾に南面して緩やかな東高西低の地勢にある。名古屋市の地形は大きく丘陵・台地・低地の3つに分けることができる。市域中心部は、5万年以上前に堆積した熱田層と呼ばれている海成の砂・シルト・粘土の互層で構成された洪積台地で、標高は5m～15mである。この台地は熱田層が堆積した後、海面が低くなった時期に河川の浸食によって削り残された部分が台地化したもので、名古屋台地と呼ばれている¹⁾。名古屋台地は、名古屋城付近から熱田神宮付近までの南北15kmほどで、東西は広いところで3kmほどの細長い形状をしている。台地の西端側と北端側は崖になっており、崖下には低地が広がっている。名古屋城はこの名古屋台地の北西端に位置している。南側と東側は比較的平坦な台地が広がる²⁾。

名古屋城は本丸・二之丸・西之丸・御深井丸・三之丸からなり、各曲輪の標高は12m～15mである。城の北側と西側が段丘崖に面し、西には濃尾平野が広がる。また、台地の西側に沿って名古屋城築城に際して開削された堀川が南北に通じている。

名古屋城は直線状の曲輪で構成され、各曲輪を土橋でつなぐとともに、櫓形や馬出を用いて強固な防御がなされている。城は南側が台地、北側が低地となる立地であり、三之丸は空堀、二之丸・西之丸・御深井丸は北と西を水堀で東と南は空堀、本丸は四方を空堀で囲まれている。

現在の県体育館の敷地を含む二之丸は本丸の東側にある。東は二之丸東門櫓形跡を、西は二之丸大手門櫓形跡をへて三之丸へ通じる。

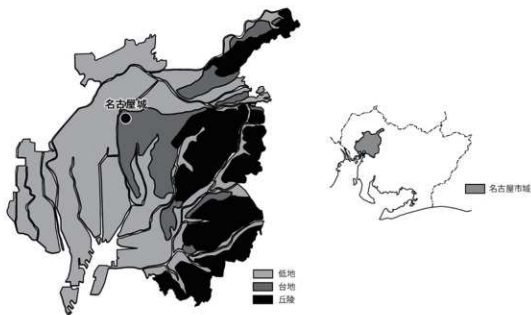


図2 地理的環境

第2節 歴史的環境

名古屋城は徳川家康が九男義直の居城として築いた城郭である。慶長15（1610）年、西国を中心に20の大名を動員して石垣や堀の普請がはじまり、同年中には主要な石垣が完成した。続いて大工頭中井正清の指揮で建物の作事が行われ、同17年には天守が完成した。名古屋城は天守の建つ本丸を中心に、東を二之丸、北西を御深井丸、南西を西之丸の各曲輪が固め、さらに南側一帯を広大な三之丸がとりまく巨大な平城である。二之丸のあたりには戦国期に今川氏が築き、のち織田氏の居城となった那古野城が存在したとされるが、縄張りの詳細は分かっていない。

家康の生前、幼少の義直は駿府の家康の下で養育され、尾張の藩政は平岩親吉が担った。このため名古屋城二之丸には親吉の屋敷が設けられたが、慶長16年に親吉が死去すると、尾張藩付家老となる成瀬正成・竹腰正信の屋敷が二之丸南部に置かれた。

家康没後の元和2（1616）年、義直は駿府から名古屋に移った。当初、義直の居館となったのは本丸御殿であったが、同3年に二之丸御殿が完成すると、同6年には義直も二之丸御殿へ居を移した。以後、幕末に至るまで二之丸御殿が尾張藩主の居館となり、本丸御殿は將軍の御成御殿とされた。

図3は、江戸時代後期における二之丸の配置を示した平面図である。二之丸の東・南・西は空堀、北は水堀に囲まれ、北東隅・南東隅・南西隅に隅櫓が、南面中程に太鼓櫓が設けられた。また、三之丸との出入り口は東鉄門と西鉄門の2所で、いずれも櫓形を形成していた。他の曲輪へは本丸大手馬出と搦手馬出を通じてつながっていた。この他、非常の際の脱出口として、本丸搦手馬出との間の堀に面する石垣に埋門が設けられた。

二之丸の北側に築かれた二之丸御殿は藩の政庁かつ藩主の住居として利用されたため、代替わりなどを機にたびたび改変された。その変遷の詳細は不明だが、おおよそ南西側が藩の公的な政庁である「表」、北東側が藩主の私的な空間である「奥」として利用された。

御殿の北側には義直が儒教聖人を祀る御祠堂を中核とする中国風の御庭を設けた。この御庭は文化年間から文政年間にかけて十代藩主斉朝の手により大きく改造された。御庭は東部へ拡張され、池や茶席が配される池泉回遊式の広大な和風庭園となった。

一方、二之丸南部は寛文3（1663）年に成瀬・竹腰両家の屋敷が三之丸に移った後、稽古場や矢場・馬場などが設けられ、「向屋敷」と呼ばれた。

明治に入ると、二之丸を含む名古屋城は陸軍の管轄となり、二之丸御殿や向屋敷の建物の大半は解体・撤去された。その跡には歩兵第六連隊の本部や兵舎が建てられ、昭和20（1945）年の終戦まで陸軍によって利用された。

終戦後、旧兵舎など連隊の建物は名古屋大学の学部棟や学生寮として利用された。昭和37年の名古屋大学の移転に伴い、学部棟として利用されていた旧兵舎が解体され、うち1棟が博物館明治村に移築され公開されている。なお、学生寮として利用されていた旧兵舎は昭和48・49（1973・1974）年の火災で焼失するまで利用された。

昭和39年には二之丸の南部に県体育館が建設された。これに伴い、二之丸大手二之門と同東二之門が解体された。大手二之門は解体後、保管していた部材を用いて昭和42（1967）年に原位置へ復原され、東二之門は同47年に本丸東二之門跡へ移築再建された。これら二つの門は同50年、重要文化財に指定された。

注1 「新修名古屋市史」第1巻 新修名古屋市史編集委員会 1997

注2 「名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第1 (2013) ~第3次 (2015)」名古屋市 2017

参考文献

「新修名古屋市史」第3巻 新修名古屋市史編集委員会編 1999

「歩兵第六聯隊歴史」歩六史刊行会 1968

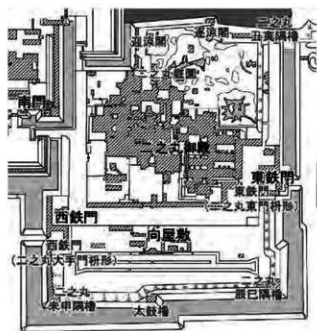


図3 二之丸

「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」

名古屋市2018 p.31図2-11を一部加筆

第3章 調査成果

第1節 周辺の調査

二之丸庭園では、昭和49年度（昭和50（1975）年1・2月）に当時の名古屋市土木局緑地部による二之丸庭園の拡充復元を契機に試掘調査を行った。その後、名古屋市教育委員会によって、昭和51年度（昭和51年5月～7月）に第1次発掘調査、昭和52年度（昭和52年7月・9月、昭和53年2月）に第2次発掘調査が庭園東部（現在の東庭園）を中心に行われた。北池東部や霜傑跡、暗渠、南池跡といった遺構が検出され、その成果に基づいて東庭園の整備を行い、昭和54年に公開された¹³¹。

年月が経つにつれ、樹木の繁茂や石組の崩落などにより、庭園としての姿が分かりにくい状況になっていたため、平成25（2013）年に「名勝名古屋城二之丸庭園 保存管理計画書」を策定し、二之丸庭園の保存管理・修復整備方針を定めた。この方針に基づき、名古屋市では平成25年度から保存整備に伴う発掘調査を継続的に実施している¹³²。

二之丸地区では、二之丸の保存活用に関する基本構想を検討する基礎的な資料として活かすため、地下遺構の残存状況を確認する試掘調査を平成30年度に第1次試掘調査、令和元（2019）年度に第2次試掘調査を行った。

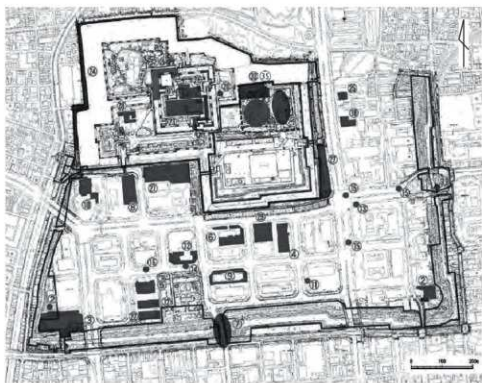





図4 名古屋城発掘調査位置

- | | |
|--|-------------------------------------|
|  特別史跡指定範囲 | 『特別史跡名古屋城跡保存活用計画』
名古屋市2018（一部加筆） |
|  名勝指定範囲 | |
|  発掘調査箇所 | |

	地点名	調査年	報告書等	発行機関
①	名古屋城二之丸庭園地点	1975～1976	「名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書」(1976)	名古屋市教育委員会
②	名古屋市公館地点 (1次・3次) 丸の内中学校地点(2次)	1987～1988	「名古屋城三之丸遺跡—1,2,3次調査の概要」(1989)	名古屋市教育委員会
③	愛知県図書館地点	1988	「名古屋城三の丸遺跡Ⅰ」(1990)	愛知県埋蔵文化財センター
④	名古屋第一地方合同庁舎地点	1988	「名古屋城三の丸遺跡Ⅱ」(1990)	愛知県埋蔵文化財センター
⑤	名古屋家庭簡易裁判所合同庁舎地点	1990～1991	「名古屋城三の丸遺跡Ⅲ」(1992)	愛知県埋蔵文化財センター
⑥	愛知県警察本部地点	1991	「名古屋城三の丸遺跡Ⅳ」(1993)	愛知県埋蔵文化財センター
⑦	本町門地点	1991	「名古屋城本町門跡発掘調査概要報告書」(1992)	名古屋市教育委員会
⑧	中部電力地下変電所地点	1992～1993	「名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査報告書—遺構編・遺物編」(1994)	名古屋市教育委員会
⑨	愛知県の九庁舎地点	1993～1994	「名古屋城三の丸遺跡Ⅴ」(1995)	愛知県埋蔵文化財センター
⑩	名古屋市能楽堂地点	1993～1994	「名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書」(1995)	名古屋市教育委員会
⑪	無線統制室地点	1995	「代替無線統制室建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(1997)	愛知県教育委員会
⑫	名城病院地点	1995～1996	「名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査報告書」(1997)	名古屋市教育委員会
⑬	地下鉄出入口地点	1998	「名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査報告書」(1999)	名古屋市教育委員会
⑭	下水道管築造地点	1999～2000	「下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書」(2000)	名古屋市教育委員会
⑮	NTT電話工事地点	2000	「名古屋城三の丸遺跡—平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(2001)	(株)西日本電信電話 名古屋支店
⑯	ガス管理設工事地点	2001	「名古屋城三の丸遺跡—ガス管理設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(2002)	(株)東邦ガス
⑰	地方簡易裁判所庁舎地点	2001	「名古屋城三の丸遺跡Ⅵ」(2003)	愛知県埋蔵文化財センター
⑱	国立名古屋病院地点	2002	「名古屋城三の丸遺跡Ⅶ」(2005)	愛知県埋蔵文化財センター
⑲	東清水橋東文差点地点	2002	「愛知県埋蔵文化財情報19」(2004)	名古屋市教育委員会
㉑	名古屋城本丸勝手手御書屋門地点	2003・2005	「特別史跡名古屋城跡本丸勝手馬出石垣修復工事発掘調査報告書」(2006)	名古屋市教育委員会
㉒	名古屋城巾下門跡地点	2003	「名古屋城跡巾下門跡発掘調査報告書—西区樋ノ口町地内400坪排水管布設工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書—」(2004)	名古屋市上下水道局水道本部
㉓	地方簡易裁判所合同庁舎地点	2006～2007	「名古屋城三の丸遺跡Ⅷ」(2008)	愛知県埋蔵文化財センター
㉔	名古屋城本丸御殿地点	2006～2008	「本丸御殿跡発掘調査報告書—第1,2,3,4次調査—」(2009)	名古屋市教育委員会
㉕	樋ノ口町線地点	2009～2011	「特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(2011)—市道樋ノ口町線整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録—」(2011)	名古屋市緑政土木局
㉖	名古屋医療センター職員宿舎地点	2011	「名古屋城三の丸遺跡—職員宿舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書—」(2011)	名古屋市教育委員会
㉗	名古屋城本丸御殿地点	2012	「本丸御殿跡発掘調査報告書—第5,6,7,8次調査—」(2012)	名古屋城総合事務所
㉘	名城公園宿泊所、二之丸乗馬駐車場地点	2014	「名古屋城三の丸遺跡—金シャチ横丁事業に伴う発掘調査報告書」(2015)	名古屋城総合事務所
㉙	名古屋城西之丸	2014	「特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(名古屋城西之丸)」(2016)	名古屋市教育委員会
㉚	名城東小公園	2015～2016	「名古屋城三の丸遺跡—第12次発掘調査—調査成果の概要—」(2017)	名古屋市教育委員会
㉛	名勝名古屋城二之丸庭園	2013～2015	「名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第1次(2013)～第3次(2015)」(2017)	名古屋城総合事務所
㉜	名古屋城本丸御殿地点	2015	「本丸御殿跡発掘調査報告書—第9次調査—」(2017)	名古屋市教育委員会
㉝	名古屋城内堀	2017～2018	「特別史跡名古屋城跡—天守台周辺石垣発掘調査報告書」(2019)	名古屋城総合事務所
㉞	名勝名古屋城二之丸庭園	2016～2018	「名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書—第4次～第6次(2020)」	名古屋城調査研究センター
㉟	名古屋城内堀	2019	未刊	
㊱	名勝名古屋城二之丸庭園	2019	未刊	

表2 名古屋城発掘調査一覧(「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」名古屋2018 表2-5発掘調査履歴を一部加筆修正。)

第2節 遺構

第1項 調査の概要

調査の主目的は、二之丸の北にある名勝名古屋城二之丸庭園と同時期に存在した二之丸御殿、馬場関連遺構等の確認であるが、近代に入り当地区には歩兵第六連隊の兵舎等が立ち並び、それらが近世の遺構と重なる事例が多々みられた。このため『御城二之丸図』（写真1）等の絵図や近代の建物配置図等を基にトレンチを設定した。

試掘調査は江戸時代の二之丸にあった御殿および馬場に関連する遺構や生活面を確認することを目的とした（表3）が、近代の陸軍関連の遺構を確認した場合もその遺構を保全し、それ以下の掘削を控えた。平成30年度の調査では北側の二之丸広場の北東隅、及び県体育館の北側を中心に、令和元年度の調査では二之丸広場の北西、県体育館の西側を中心にトレンチを設定した。掘削範囲を2m×4mのトレンチとし各年度5所のトレンチを設定した。

(1) 平成30年度の試掘調査

平成30年度はトレンチ1からトレンチ5の5所のトレンチ（各2m×4m）を設定した。トレンチ1は名勝名古屋城二之丸庭園の西に近接する二之丸広場の北東の隅に設置した。トレンチ2からトレンチ5は主に県体育館北側に設定した。トレンチ2は名古屋城二之丸東一之門跡の北にある植栽内に設定した。トレンチ3、4は県体育館の駐車場内に、トレンチ3は同北東隅、トレンチ4は同中央北側に設定した。トレンチ5は二之丸地区の南東隅近くに設定した。（図5）

(2) トレンチ1（T-1 図6）

長辺が東西方向で、設定したトレンチの地表高は14mから14.1mである。文政期の姿を描いているという『御城二之丸図』（写真1）によると、当地点は二之丸御殿の北西、「奥」の一角に相当する。この二之丸御殿関連の遺構を確認することを調査の目的とした。また近代では陸軍の倉庫や医務室が展開し¹¹³、軍舎は戦後、名古屋大学の建物として利用された。

厚さ5cmから10cmの薄い表土（褐色砂質土層）を除去すると、にぶい黄褐色砂層が標高約14mで厚さ10cm、水平に堆積する。この層は遺物を全く含まなかったが、土層の状況から現代の二之丸広場を整備するための整地層であると思われる。その下には標高13.3mから13.5m辺りまで厚さ40cmから60cmほど、3層の褐色シルト層が堆積し、塩化ビニール管、ビニール、瓦、レンガ、炭化物などが出土した。3層より以下、約1mまでは、瓦、レンガ、大型のコンクリートブロックが混ざる、にぶい黄褐色を呈しシルト質の4層がみられた。これ以下の掘削は標高12.6mまでで、それ以下の調査を断念した。4層はプラスチック、塩化ビニール等の現代の遺物を含まない。トレンチ自体が土坑の中に位置する状況と思われる。出土遺物や戦後の建物利用の状況から名古屋大学の学舎として利用された後、昭和30年代に除去された際にそれらの部材を廃棄したものと考えられる。近世の遺構面は確認されなかった。

(3) トレンチ2（T-2 図7）

長辺が東西方向のトレンチを、二之丸東一之門跡の北側の植栽の中に設定した。地表高は14mから14.1m

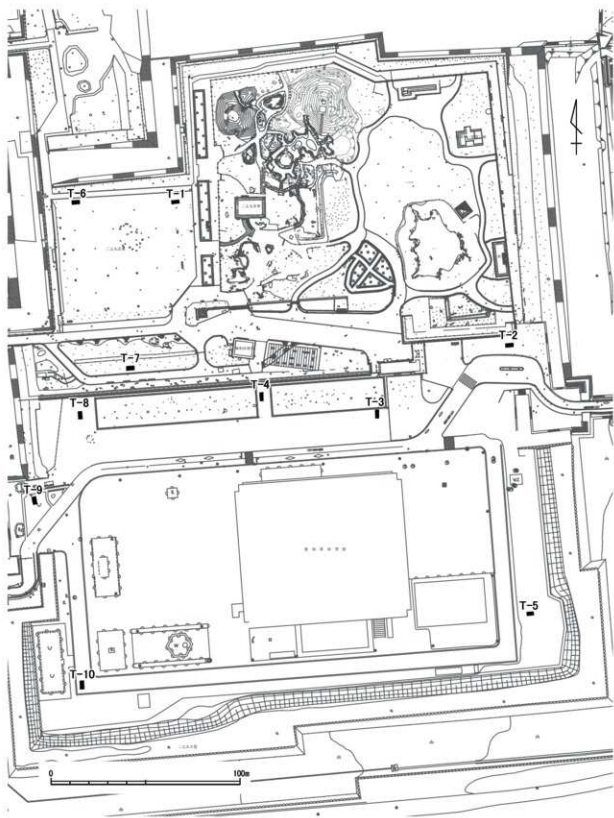
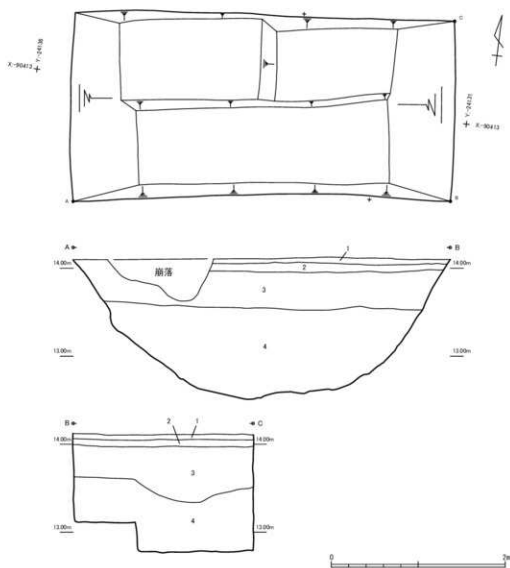


図5 トレンチ位置図



1. 10YR5/1 陶灰色砂質土(表土)。
2. 10YR7/4 におい黄橙色砂。遺物なし。
3. 10YR5/1 陶灰色シルト。稜<轉まり、埴び管・陶器・瓦・炭、多量に混じる。
4. 10YR5/4 におい黄褐色シルト。焼土・コンクリート混・切り石が混じる。

図6 T-1平面図・土層図

実施年度	トレンチ	位置	設定目的
平成30年度	T-1	二之丸広場北東隅	二之丸御殿の北西隅の建物群の確認
	T-2	県体育館の北東隅	二之丸東二之門に伴う番屋関連遺構の確認
	T-3	県体育館の北東、北駐車場の北東隅	二之丸御殿の南にあった建物群の確認
	T-4	県体育館の北、北駐車場の中央	二之丸御殿の南にあった建物群の確認
	T-5	県体育館の南東隅、東駐車場の南端	馬場関連の遺構の確認
令和元	T-6	二之丸広場北西隅	二之丸御殿の北西隅にあった土蔵の確認
	T-7	二之丸広場南の梅林	二之丸御殿の南にあった建物群の確認
	T-8	県体育館の北西隅、北駐車場の西端	二之丸御殿の南にあった建物群の確認
	T-9	県体育館の西	二之丸大手二之門に伴う番屋関連遺構の確認
	T-10	県体育館の南西隅	馬場関連の遺構の確認

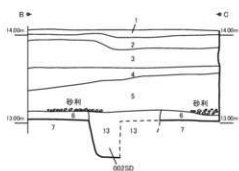
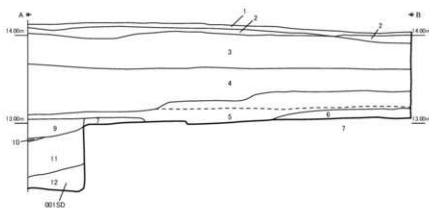
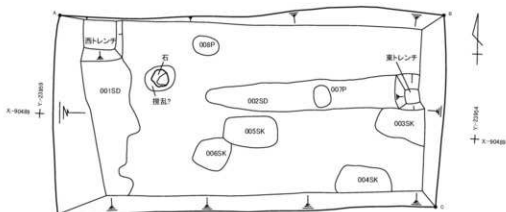
表3 トレンチ設定目的

年

である。〔御城二之丸図〕(写真1)によると、当地点は江戸時代には二之丸東一之門の番屋に関わる建物が展開し、陸軍の資料をみると近代は建物等がない空地であった¹⁴⁾。

地表は西から東へやや傾斜しており、北西隅の地表が標高14.12m、北東隅が標高14.05mを測り、これは東側に植え込みがあり植栽に伴う傾斜である。表層は薄く4cmから10cm堆積し、灰黄褐色シルト質土層である。その下には、小石を多量に含む2層、黄橙色シルト層の山土がみられる。層は途中途切れながらも厚さ20cm堆積する。3層は厚さ30cmから40cm堆積し、レンガ、瓦、褐色粘土ブロックを含む褐色砂質土層である。4層上面は標高13.6mでほぼ平坦面を形成しており、厚さ10cmから50cmで標高13.6mから13.1mに堆積する。西から東へ、北から南へ層は薄くなっている。層中からは瓦、磁器、プラスチックが出土し、小石を多量に含む黄橙色シルト質土層の山土である。出土遺物から3、4層は現代の公園整備に伴う整地層である。4層の下、標高13.1mから13.6mの間でみられるのが5層である。層の上面高はかなり高低差があり、厚さは5cmから45cmであり東から西に、南から北に向かい薄くなる。この層からレンガ、瓦、磁器などが出土しており、層中には標高13.2m辺りにコークス殻が筋状に厚さ3cm程、堆積している状況を確認できた。5層の上面はかなり削平を受けていると思われる、出土遺物等から近代の堆積層であると思われる。6層はトレンチの東側にしか見られず、標高13mから13.2mに堆積し、厚さ20cmほどで東壁では上面に砂利が薄く堆積する箇所もみられ、硬化面を形成する。灰黄シルト質土層で固く締めり層中からは山茶碗、須臾器、土師器の小片が出土した。このことからこの層は中世以降に堆積したものであり、硬化面は江戸時代の面である可能性が高く、トレンチの東側の一部に残るのみである。6層の下には7層の黄色ブロックや黒褐色ブロックの混ざるにぶい黄橙色シルト層がトレンチ全面で堆積する。7層には遺物が含まれず、時期は特定できないが、近世以前の整地層であると考えられる。

遺構は6、7層の上面、標高13mで検出した結果、トレンチの西で南北に走る溝(001SD)と東で東西に走る溝(002SD)や小型の土坑やピットの一部を検出した。これらは5層を除去したのちに検出されており、6層または7層から掘り込まれる。001SDと002SDは一辺20cm×20cmのトレンチを壁際に設定して掘削を試みた。001SDの北壁はほぼ垂直に掘り込まれ南壁は調査区外に達するため、溝幅不明である。確認面から80cmまで掘り下げたが、溝底は確認できなかった。埋土は黒色ブロック、黄色ブロックが混ざる褐色シルト層で、多量の瓦などが出土したと共に漆喰と思われるものがみられ、番所などの建物の廃材を廃棄し



1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト質土(表土)。やや砂粒を含む。
2. 10YR8/8 黄褐色シルト。小石など多量に混じる。
3. 10YR6/1 褐灰色砂質土。レンガ瓦を含む。褐灰粘土ブロック混じる。
4. 7.5YR7/8 黄褐色シルト質土。小石多量に含む。西に向かい、厚くなる。瓦・磁器・プラスチックレンガを含む。
5. 7.5YR3/2 粘質土およびSPR3/1 暗青灰色小礫層がスズ状に入る層。小石・コルクスガク瓦・磁気片・レンガを含む。かたくなる。
6. 2.5Y5/1 黄灰色シルト層。中世の盛含層。中世(山茶碗)・古代(須恵器)の遺物混入。
7. 10YR6/4 濃い黄褐色シルト。黄色ブロック・黒褐色ブロック多量に混じる。面土が入りかたくなる。整地層。瓦をわずかに含む。
8. 7.5Y2/1 黒色粘質土。中世・古代の遺物を含む。
9. 10YR5/1 褐灰色シルト。黒色ブロック混じる。001SD埋土。瓦混じる。
10. NR/ 灰白シルト質土(漆喰?)。001SD埋土。
11. 10YR4/1 褐灰色シルト質土。瓦。多量に混じる。黒色ブロック混じる。001SD埋土。
12. 7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦多量に混じる。001SD埋土。
13. 7.5Y4/1 褐灰色シルト。黒色ブロック混じる。002SD埋土。

図7 T-2平面図・土層図

た大型土坑になる可能性も考えられる。002SDは幅85cm、深さ50cmを測り、東は調査区外に達し、西はトレンチのほぼ中央までの2.5mで途切れる。埋土は黒色ブロックが混ざる褐色シルト層であり、瓦が出土している。その他の土坑、ピットについては検出のみで掘削はしていない。ピットのほとんどは、黒色ブロックが混ざる褐色シルト層が埋土であり、検出段階では遺物は出土していないが、検出面から江戸時代の遺構である可能性が高い。ただし、トレンチの西側で検出された石を伴うピットに関しては5層に類似した小礫混じりの土が埋土に混ざり、5層から掘り込まれた可能性もあるため、近代以降のものと思われる。

調査の目的であった二之丸東一之門跡の番所に関わる遺構は検出できなかったが、江戸時代の生活面の一部が確認できた。番所関連の遺構についてはT-2のさらに東側の石垣に近い箇所に展開する可能性が高い。5層上面は近代の遺構面だと思われるが、上面は現代の公園整備によって削平をうけている。

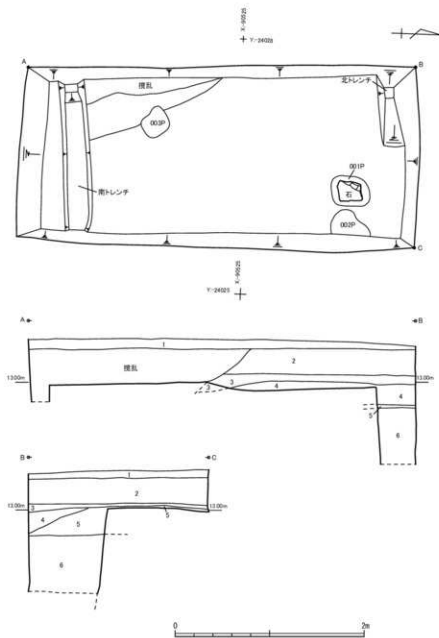
(4) トレンチ3 (T-3 図8)

長辺が南北方向のトレンチを県体育館の北側にある駐車場の北東隅に設定した。地表高は標高13.5mを測る。『御城二之丸図』(写真1)では、当地点は江戸時代には二之丸御殿の奥向きの建物がみられ、近代には『歩兵第六聯隊歴史』によると、陸軍の歩兵第六連隊の兵舎に関わる遺構が展開することが予想された。

表土は駐車場造成のための碎石からなる灰色礫層で固くしまる。厚さは4cmから12cmあり、標高は13.4mから13.52mとなる。2層は厚さ30cmほどで標高13.4mから13.1mまでに達する。礫を多く含み、瓦、レンガ、金属片が混入し、固くしまるにぶい褐色砂礫層である。共に駐車場の造成のための現代の整地層である。3層の上面は標高13.1mで平坦面を形成し、厚さ10cmから20cmを測り、標高12.9mから13.1mまでに達する。礫を含みレンガが混入し、固くしまる黒色シルト質土層である。上面で平坦な硬化面を形成し、出土遺物に現代のものを含まないことから、近代の生活面と考えられる。4層はトレンチ南半分で現代の掘削に削平され、残存していない。北から南へ向け標高12.9mから13.0mとやや傾斜しており、北端では厚さ20cmを測る。わずかに瓦を含む褐色粘土ブロックが混入する浅黄色砂質土層で年代を特定できないが、状況から江戸時代の整地層であるとされる。この層の上面が江戸時代の生活面であると思われる。5層はトレンチの北から東にかけて標高13mの面で見られ、西から南にかけては4層の下に潜り込んでいく。標高12.8mから13mに達し、厚さは4cmから20cmを測る。礫を含み近世陶器、瓦がわずかに出土している。黒褐色砂質土層で、江戸時代の包含層である。

掘削坑が所在する南端と北端にサブトレンチを設置し、5層以下の堆積を確認した。南のサブトレンチは標高12.8mまで掘り下げたが、現代の掘削坑を掘り切れなかった。北のサブトレンチでは標高12.7m以下、12.1mまで掘り下げたが、5層の下には黒色粘土ブロック、黄色砂が混ざる黒褐色シルト質土層がみられた。出土遺物はなく時代は特定できないが、近世の遺物を包含する5層の下に堆積することから近世以前の整地層と考えられる。

3層を除去したのちに、4層の上面で遺構検出を行ったが、トレンチの南西隅には2層から掘り込まれる現代の掘削坑がみられた他、土坑、溝を検出した。いずれも褐色粘土ブロックが混ざるしまりのない埋土であり、近代以降の遺構である可能性が高い。トレンチの北東では35cm×45cmの方形のピットを一基検出した。このピットは四角く割った23cm×28cmの切石を有しており、石上の標高は13.0mである。ピットの



1. N6/ 灰色砂質土、礫多量に含む、かたしまる、表土(駐車場の上層)
2. 75YR5/3 濃い褐色砂礫層、礫多量に含む、瓦・金属片・木片含む、固くしまる、「平成二年」10円硬貨出土、駐車場に伴う整地。
3. 25Y2/1 黒色粘質土、礫含む、かたしまる、近代の生活面。
4. 25Y7/4 浅黄色砂質土、褐色粘土ブロック確認、褐色粘土ブロック確認、整地層。
5. 10YR3/2 黒褐色砂質土、礫含む、瓦出土、近世陶器片含む、北トレンチの一部で見られ、西壁は非常に薄い整地層、この層の上面が近世の生活面。
6. 10YR3/2 黒褐色シルト質土、黒色粘土ブロック・黄色砂が陥状に入る、江戸時代の整地層。

図8 T-3平面図・土層図

埋土は他のピットと異なり、褐色シルト質土で固くしまる。遺物は確認していない。トレンチ内で検出された切石を伴うピットは、この1基のみであるが、検出面と切石の形状から近世の建物の基礎である可能性が高く、『御城二之丸図』（写真1）から判断すると、二之丸御殿に伴う建物であると思われる。この礎石はトレンチ外へ続くと思われる。

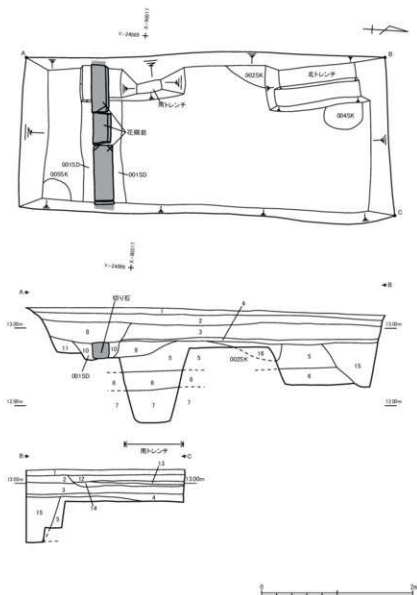
このトレンチでは江戸時代の生活面が一部、掘削を受けながらも残存しており、4層上面、標高約13.0mで建物の基礎の一部を検出できた。具体的な建物構造は試掘調査では全貌は掴み得なかった。また近代の遺構は検出できなかったが、3層上面、標高13.1mで近代の生活面と考えられる硬化面を確認できた。

(5) トレンチ4 (T-4 図9)

長辺が南北方向で、地表高が13.2mから13.3mを測る。『御城二之丸図』（写真1）によると、当地点は江戸時代の二之丸御殿の南端、表向き建物にあたると考えられ、近代は『歩兵第六聯隊歴史』の兵舎配置図によると、T-3と同様に歩兵第六連隊の兵舎に関わる遺構が展開すると考えられた。

表層は南から北へわずかに傾斜しており、厚さ10cmの礫層が標高13.2mから13.3mまで堆積する。にぶい赤褐色礫層で、多量の礫を含み固くしまる。現代の駐車場整備に伴う土層である。2層は標高13.0mから13.2mまで堆積し、厚さ20cmを測る。礫を多量に含み、プラスチック片が混入する。灰オリーブ色礫層で固くしまる。現代の土層と考えられる。3層は標高12.8mから13mまで堆積し、厚さ20cmを測る。瓦、レンガが混入し、黒色粘土ブロックが混ざる黒褐色シルト質土層で近代以降の土層であると考えられる。4層は薄いですが、固くしまっており、その上面は12.9mでほぼ平坦面を形成し、西壁では厚さ4cmでほぼ均一であるが、北壁の東側では厚さ10cmとなり厚く堆積する。オリーブ黒色シルト層で礫が混入し、遺物はほとんど含まれず近代の生活面だと思われる。5層の上面は標高12.8mでほぼ水平となり、厚さは平均して30cmほどであり北壁では40cmを測る。標高は12.4mに達する。瓦がわずかに混入し、黄色粘土ブロック、黒色粘土ブロックが混ざる灰黄褐色砂質土層で固くしまる。出土遺物や検出高から江戸時代の整地層であり、この層の上面が近世の生活面であると考えられる。6層は標高12.2m以下から12.5mでみられ、南に向かいわずかに傾斜する。層中から瓦がわずかに出土しており、黄色粘土ブロック、黒色粘土ブロックが混入するにぶい黄橙色砂質土層である。5層と同様に瓦が出土していることから江戸時代の整地層と考えられる。なおトレンチの北側でこの層の堆積状況を確認するために幅60cm、長さ1.2mのサブトレンチを西壁沿いの北東隅に設定した結果、6層は標高12.3mまで続き、その下で地山である熟田層を確認した。6層の堆積状況を確認するため、トレンチの南側にトレンチの西壁沿いに幅40cm、長さ80cmのサブトレンチを設定し掘削を行ったところ、標高12.2mで7層を確認した。7層は黄色粘土ブロック、黒色粘土ブロックが混ざるにぶい黄橙砂質土層で遺物は出土しておらず、その厚さも確認していない。検出状況から江戸時代以前の整地層である可能性が高い。

検出された遺構はトレンチの南で東西方向に配された25cm×25cmで長さ40cmから70cmの直方体の石材からなる石列とそれに伴う溝001SDである。石列の石はいずれも花崗岩であり、トレンチ内では少なくとも4つ検出した。この石列は幅50cmで、深さ20cmの001SDを伴う。石列の西側と東側はさらに各々、調査区外に続く。石列の上面の標高は12.8mで掘方の001SDの検出面の高さは石列の上面の高さとほぼ同じである。埋土は黄色粘土ブロック混じりのシルト質土層、1層からなり、石の下は特に根固めしたような痕跡はみ



1. 25YR4/3 におい赤褐色礫層。礫多量に混じる。かたしまる。表土。
2. 7.5Y5/2 灰オリーブ色礫層。礫多量に含み、プラスチックゴミ入る。
3. 5YR3/1 黒褐色シルト質土。黒色ブロック・砂粒・瓦レンガ混じる。
4. 5Y3/1 オリーブ黒色シルト質土。礫混じり、かたしまる。うすく堆積し近代の生活面を形成。
5. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土。黄色・黒色ブロック混じる。瓦混じり、かたしまる。近世の整地層。
6. 10YR6/4 におい黄褐色砂質土。黄色・黒色粘土がり。まねに入る。瓦がわずかに入る。
7. 10YR6/3 におい黄褐色砂質土。黄色・黒色ブロックがわずかに入る。
8. 10YR5/1 褐灰色砂土。礫多量に混じる。切り石を埋める際の埋土。
9. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土。褐色ブロック混じる。礫わずかに混じる。
10. 7.5YR4/1 褐灰色シルト質土。黄色粘土粒混じる。切り石の掘り方・0015D埋土。
11. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土。黄色・黒色ブロック混じる。
12. 10YR7/2 灰白砂質土。礫多量に混じる。
13. 5B1/7/1 青黒色アスファルト舗装。
14. 7.5Y5/1 灰色砂。黒色ブロック混じる。アスファルト舗装のための整地層。
15. 7.5YR5/1 褐灰色砂質土。黄色・黒色ブロック。遺構の埋土。
16. 7.5YR5/1 褐灰色砂質土。黄色・黒色ブロック。遺構の埋土。

図9 T-4平面図・土層図

られず、001SDは石列を設置するために掘削されたものである。溝を伴う石列は近代の陸軍の兵舎に伴う遺構と考えられるが、構造から兵舎の基礎とは異なり、兵舎に付随する何らかの遺構であると考えられる。『歩兵第六聯隊歴史』にある当時の建物配置図をみると、兵舎の南に近接して花壇等があることから、花壇に伴う縁石である可能性が高い。

その他遺構としては近代の生活面である4層を除去した段階で5層の上面で土坑、002SK～005SKを検出している。いずれの土坑からも検出時に出土遺物はみられなかったが、検出面から江戸時代の遺構である可能性が高い。

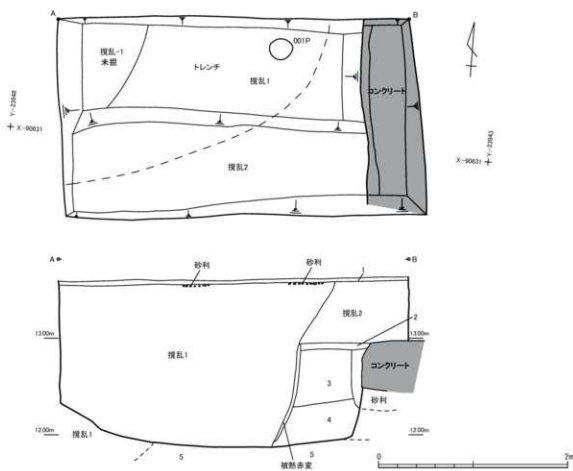
5～7層の整地層を確認している。5、6層は出土遺物から近世の整地層である可能性が高く、名古屋城築城以降の近世の二之丸整備に伴う可能性が高く、この層の下位にあるトレンチの南側にみられる整地層、7層は築城に伴うものなのか、それ以前のものなのかは不明である。

(6) トレンチ5 (T-5 図10)

トレンチは県体育館の東南に設定した。長辺が東西方向で、地表高が14.0mから14.1mを測る。『御城二之丸図』(写真1)によると、当地点は馬場に関わる遺構が展開することが予想された。また近代では『歩兵第六聯隊歴史』によると、周辺に陸軍の既関連の建物が展開する。

表土は東から西へわずかに傾斜しており、礫混じりの褐灰色シルト質土層で厚さ4cmと薄く堆積し、標高13.0mを測る。この層の下面では薄く堆積する砂利の層が部分的にみられる。この層を除去するとトレンチ全面に現代の攪乱1、2が広がる。これらは西側にある褐灰色砂質土層を埋土とする攪乱1と東側にある黄灰色砂質土層を埋土とする攪乱2とからなり、攪乱1が攪乱2を切る。攪乱1は特に深く、地表から1.5m掘り下げてもトレンチの北西隅では、底は確認できなかった。攪乱2は地表から70cm、標高約13.0mまで掘り下げられており、この攪乱土坑を除去すると、東側には2層、厚さ10cmほどの薄い灰白色砂層がある。標高は12.9mから13.0mである。この層には大礫が混じり硬くしまっている。近代の生活面であると思われる。この上面、標高13.0mでコンクリートを確認した。コンクリートはトレンチの東端を南北に走り、厚さは50cmである。東端と北端は調査区外に続き、全体の規模、形状は不明である。これは陸軍関連の建物と考えられ、名古屋城二之丸の南東隅にあった既に関連する遺構である可能性が高い。コンクリートの下には根固めのための砂利の層がみられ、この層に切られる状態で3層、灰褐色シルト質土層を確認した。この層の上面は水平であるが、下端はやや西へ傾斜する。厚さは50cmを測り、炭化物粒が混入し黄褐色シルト質土の三和土と思われる土が筋状に入る。瓦片が少量出土した。この層は江戸時代の整地面である可能性が高い。4層は標高11.9mから12.4mにあり、厚さ50cmを測る灰黄褐色砂質土層である。3、4層の西側は攪乱1に切られ、東側は前記した砂利層により切られている。4層を除去した段階で、地表下1.5mで掘削を終えた。標高は11.8mから11.9mとなり、トレンチ底面の検出で5層、黄色シルト層が確認できた。この層は黄色粘土ブロック、黒色粘土ブロックが多量に混入する整地層であり、5層の上面を精査中に遺物は出土しておらず形成時期は不明である。また5層の精査中にピットを検出できた。遺構に遺物は伴わず時期は不明であるが、掘削深度等から近世以前の遺構である可能性がある。

攪乱1、2及び近代の遺構によって、近世の遺構面の遺存状況は極めて悪い。『御城二之丸図』(写真1)には県体育館より南側には馬場等が描かれている。このトレンチでは馬場に関連する遺構は検出できな



1. 10YR4/1 層灰色シルト質土。表土、捜乱1の埋土。角礫が入る。
- 捜乱1 10YR5/1 層灰色砂質土。もみみ。
- 捜乱2 25YR4/1 層灰色砂質土。捜乱1に切られる。電線ゼノール入る。
2. 75Y8/1 灰白色砂。夫體混じる。コンクリート上面とほぼ同じ面。近代(軍隊)の生活面か？
3. 75YR4/2 灰褐色シルト質土。三和土がブロック状に入ったり層状に入る。炭化物・灰の小片散じる。江戸の遺構？。整地層？。遺物なし。
4. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土。炭化物粒わずかに混じる。黄色ブロックわずかに混じる。江戸期の遺構？。整地層。遺物なし。
5. 25Y8/6 黄色シルト質土。黄色と黒色ブロック多量に混じる。整地層。遺物なし。

図10 T-5平面図・土層図

かったが、近世の整地層（3層）と思われるものと時期不詳の整地層（4、5層）をトレンチの東半で確認している。後者が近世の二之丸整備に伴うものか、それ以前に形成されたものなのかは現時点では不明である。

(7) 令和元年度の試掘調査

令和元年度の調査では北側の二之丸広場の北西隅と南西および県体育館周辺の西側に、T-6からT-10の5所、2m×4mの規模のトレンチを設定した。T-6は二之丸広場の北西隅に、T-7は県体育館との境界に近い梅林の中に設定した。T-7は県の敷地の北西隅に、T-8は二之丸大手一之門跡の北側に、T-10は県体育館の南西の通路際に設定した（図5）。

(8) トレンチ6（T-6 図11）

長辺が東西方向で、設定したトレンチの周辺の地表高は約14mである。『御城二之丸図』（写真1）によると、当地点は二之丸御殿の北西端で土蔵が描かれている。また近代には陸軍の倉庫や医務室が展開していた¹¹⁵。

地表から約60cm掘り下げた標高13.4mの8層直上で、硬化面を確認した。この面はトレンチの中央まで薄く続き、東側では見られなくなる。代わりに同じ高さで9層、黄褐色砂質土層が硬化面を形成し、南壁の東端近くまで続く。この8層以下を掘削したが、下位にあたる9層から11層でも瓦、レンガ、タイル等が出土したため、南壁沿いに幅50cmのサブトレンチを設定し地表下1.7mまで、遺構面の有無と遺物を確認しながら掘削を進めた。標高にして12.3mまで掘り下げても、トレンチ底からはレンガ、タイル等の近代以降の遺物がみられる状況であった。これによってT-6の大部分がこの近代以降の堆積土によって占められ、近世の遺構面はほとんど残存していないことと判断した。トレンチの東端の南壁沿いの標高13.1mで上面が平坦面で、検出できる規模で厚さ30cm、幅60cm以上の石がみられた。これは近代の遺物が混入する10層暗灰黄色粘質土層を切って、同じく近代の遺物を包含する11層オリーブ褐色粘質土層の上に乗っている状態であるため、近代以降に入り込んだ可能性が高い。

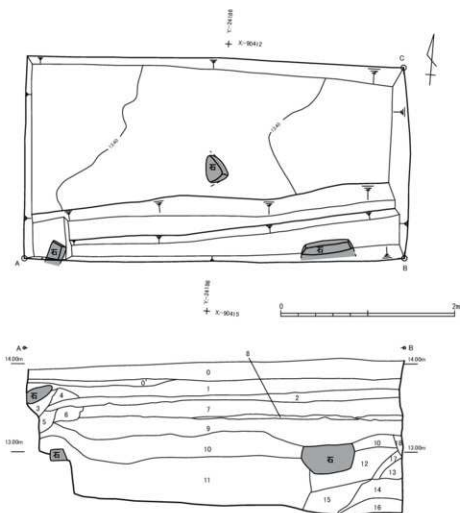
このトレンチでは近世の遺構面は確認できなかった。

(9) トレンチ7（T-7 図12）

二之丸御殿の表向きの一部関連の遺構確認を目的として、二之丸の梅林の中に東西方向に長い2m×4mの調査区を設定した。『御城二之丸図』（写真1）によると、当地点は孔雀御門の北東部周辺である。陸軍期には付近に厨房及び浴場があった¹¹⁶。

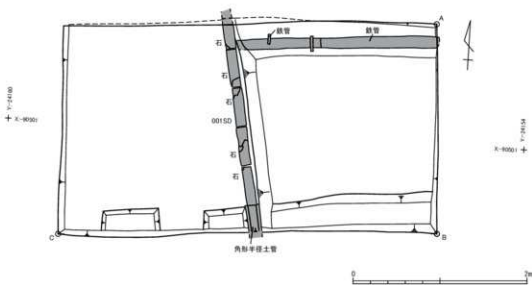
地表高は13.2mから13.6mである。地表は北から南へやや傾斜しており、北西隅の地表高が13.6m、南西隅の地表高が13.2mである。地表下60cmから80cmに砂質土が堆積する。その下に30cmから60cm粘質土が堆積し、その下は再び砂質土が堆積している。

地表下約1.8mまで瓦やレンガ、タイルなど近代以降の遺物を包含する層がみられた。地表下約70cm、標高12.5mから12.6mで硬化面を形成しており、この面で南北に延びる溝（001SD）を検出した。溝は常滑焼の角形半径土管（以下、半径管と呼称する。）6本と半径管に伴う鉄平石製の蓋6つで構成されていた。半

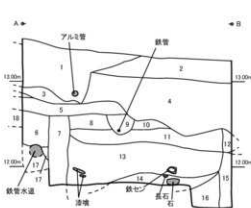


0. 表土
 1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土。かたじまっている。
 2. 5Y6/2 灰オリーブ色砂質土。かたじまっている。芝の根を含む。
 3. 2.5Y3/2 黒褐色やや粘質。黄白色粘土ブロック少量含む。
 4. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土。かたじまっている。
 5. 2.5Y5/2 暗灰黄色やや粘質。
 6. 5Y4/2 灰オリーブ色やや粘質。かたじまっている。
 7. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土。黄白色粘土ブロック含む。かたじまっている。
 8. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土。かたじまっている。上面に灰白色砂質土を含む。
 9. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土。黄灰色の粘土ブロック含む。かたじまっている。瓦・タイル含む。
 10. 2.5Y4/2 暗灰黄色やや粘質。4-12cmの白黄色の大顆粒粘土ブロック含む。瓦含む。
 11. 2.5Y4/3 オリーブ褐色やや粘質。白黄色の粘土ブロック含む。瓦含む。
 12. 2.5Y4/4 オリーブ褐色やや粘質。白・黄・黒色の粘土ブロック含む。
 13. 7.5YR5/6 明褐色粘質。しりややあり。黒色粘土ブロック含む。
 14. 10YR3/4 暗褐色粘質。しりややあり。茶・黒色粘土ブロック含む。
 15. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質。しりややあり。小石含む。
 16. 10YR4/4 灰黄褐色粘質。かたじまっている。
 17. 2.5YR3/1 暗赤灰色。シルト質で均質。盛土の一部か。
 18. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土。しりややあり。黄色粘質ブロック (3cmぐらい) 目立つ。

図11 T-6平面図・土層図



1. 25Y5/6 黄褐色砂質土。
2. 10YR2/2 黒褐色砂質土。
3. 10YR3/3 暗褐色粘質土。
4. 10YR3/3 暗褐色粘質土。
5. 10YR4/3 黄褐色土。灰片?含む。白色粘土ブロック(5cm大)少量混じる。
6. 10YR3/4 褐色砂質土。石(2~4cm程度)多く含む。ピット。
7. 7.5YR3/3 暗褐色やや粘質土。黄・黒の粘土ブロック(0.5cm大)含む。ややしまる。小石まばら。石列の掘り方か?。平石で蓋をした溝。
8. 10YR3/3 暗褐色やや粘質土。白・黄・黒の粘土ブロック含む。東壁につづく。ややしまる。
9. 10YR4/3 黄褐色粘質土。白・黄の粘土ブロック(3cm大)含む。ピット状。
10. 10YR4/3 灰黄褐色。上方はシルトやや強い。下方は砂質土が主。白・黄の粘土ブロック含む。橙色のシルトブロック(0.5cm以下)目立つ。
11. 25Y4/3 オリーブ褐色砂質土。白・黄の粘土ブロック(3~5cm大)多く含む。よしまっている。
12. 10YR4/3 黄褐色砂質土。白・黄の粘土ブロック少量含む。
13. 10YR3/4 暗褐色やや砂質土。白の粘土ブロック少量含む。一古代の包含層?。
14. 10YR4/1 褐色。灰輪陶器出土(古代の包含層)。



1. 10YR3/4 暗褐色やや粘質。しまりあり。小石混じる。
2. 25Y5/6 黄褐色砂質。しまりあり。
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質。しまりあり。粘質土混じる。小石混じる。
4. 10YR2/2 南壁2層と同じ。
5. 10YR4/3 黄褐色。しまりあり。黒色シルトブロック(1cm以下)やや目立つ。やや振る。
6. 10YR3/4 暗褐色砂質。しまりあり。黒色シルトブロック(1cm以下)目立つ。水道管?埋土。
7. 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂質。しまりあり。粘質土混じる。水道管?掘り方。6に比べ色鮮明らしい。
8. 10YR3/3 暗褐色砂質。しまりあり。ガラス片・銅線混じる。
9. 10YR2/3 黒褐色やや粘質。しまりあり。鉄管あり。(水道管か?)。
10. 10YR4/3 黄褐色砂質。しまりあり。鉄片混じる。Sに似る。
11. 7.5YR2/3 暗褐色粘質。しまりあり。南5層に似る。
12. 10YR3/3 暗褐色やや粘質。しまりあり。白・黄の粘土ブロック含む。南8層。
13. 10YR5/3 黄褐色粘質。しまりややあり。鉄線あり。土曜か。
14. 10YR3/4 暗褐色やや粘質。白い灰物(長石?)あり。
15. 10YR4/3 黄褐色やや粘質。黄の粘土ブロック含む。
16. 25Y3/3 暗オリーブ褐色やや粘質。小石混じる。
17. 10YR3/4 暗褐色やや粘質。6層中のブロックか?。

図12 T-7平面図・土層図

径管は側溝用として、筒状の土管と共に丸形と角形の2種類が販売されたという¹⁰⁷。最も南の蓋を外し、半径管内を掘削したところ管内部から瓦の小片が出土した。

001SDから東半分を掘削したところ、地表下約1.2m、標高12.3mで東西に延びる鑄鉄管と上に延びる引き込み管の一部を検出した。鑄鉄管は直径約15cm、引き込み管は直径約5cmである。調査区の東半分を標高11.8mまで掘削したが近世の遺構面を確認できなかったため、標高11.5mまで深掘りを行った。近世の遺構面は確認できなかったが、近代の整地層の下の層で中世、古代の遺物を包含する層（14層）を確認した。

調査区の東で近代の遺構面しか確認できなかったことから、西でも同様の状況であると判断し、001SDの面より下位の掘削は行わなかった。

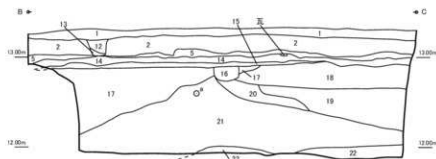
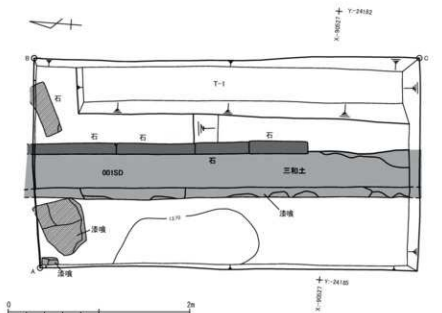
半径管は土層から昭和のものと考えられる。鉄管は陸軍に関係する水道管と考えられ、陸軍期の炊事場や浴場付近のため、このような施設に関係するものかもしれない。

(10) トレンチ8 (T-8 図13)

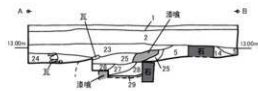
長辺が南北方向で、設定したトレンチの周辺の地表高は13.2mから13.3mである。『御城二之丸図』（写真1）をみると、当地点は二之丸御殿の南西隅の空閑地辺りに位置する。近代には陸軍の本部が展開していた。

表土層では瓦、レンガ、ガラス、プラスチック等の近代以降の遺物が多量に見られた。表土層を除去した後、地表下40cmから50cmまで掘り下げた。標高12.7mから12.8mで001SDを検出した。溝の西側の立ち上がりは白橙色の漆喰、東側は花崗岩切り石（南側は一部、欠損）からなる。幅35cm、深さ15cmほどの001SDはトレンチの中央を、南北方向にトレンチを縦断する状態で検出された。溝の西側の漆喰は溝底から垂直に立ちあがる。検出位置から、『歩兵第六聯隊歴史』の記述にある歩兵第六連隊の本部の建物の東壁跡に相当すると思われる。東側の花崗岩は長辺80cmから95cm、短辺13cm、厚さ8cmの1枚の切石が4本並んでおり、トレンチの南側では見られなかった。溝底は浅い船底状を呈し黒色に変色した厚さ2cmの漆喰がはられていた。001SDの埋土は白橙色の漆喰ブロックや黄色粘土ブロックが多量に混入する層からなり、人為的に埋め戻された様相を呈する。溝の埋土からは遺物はみられなかった。溝の西側は拳大の白橙色の漆喰ブロックが多量に入るにぶい黄橙色砂質土層、24層からなり、北壁近くでは倒壊した建物の壁の一部と考えられる縦60cm、横50cmの方形を呈する大きな漆喰の塊がみられた。

近世の遺構、遺構面の有無を確認するために、トレンチの東壁沿いに幅60cmのサブトレンチを設定し、遺構の状況や土層の堆積状況を確認しながら地表下1.5m、標高11.9mまで掘削を行った。その結果、標高12.8mの近代の遺構面以下には、遺構面を確認することはできなかった。近代の遺構面以下の土層の堆積状況は18層から21層からなる一群の層と17層とに大きく二分され、いずれも地山ブロック、黒色土ブロックが多量に混入する整地層である。トレンチの南側では18層から21層がトレンチ中央から南に向けて傾斜し堆積し、トレンチの北側ではそれらを切る状態で中央から北に向けて傾斜する17層がみられた。いずれの層からもほとんど遺物はみられなかったが、21層から大窯期の灰軸陶器の端反皿の口縁の小片が1点のみ出土している（図13の断面図中のa）。これらの整地層の形成時期の詳細や性格は特定できないが、近世以前に大規模な整地が行われていることが判った。

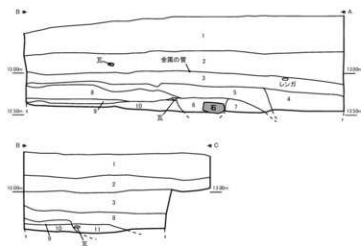
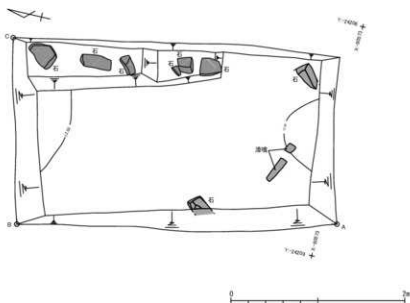


1. 25Y5/2 暗灰黄色砂質土、砂粒混じる。しまりあり。
2. 75V7/1 灰白色砂質土、茶白ブロック土混じる。
5. 25Y 暗オリーブ色砂質土、白色砂土混じる。
12. 25Y6/1 灰白色シルト質土、粘土ブロック・小石混じる。公園整備の整地層をさる。土壌埋土。煉瓦粒混じる。
13. 25Y7/1 灰白色砂質土・小石混じる。
14. 25Y3/1 黒褐色シルト質土、漆喰(白)・小石・瓦混じる。かたじまる。
15. 5Y7/1 灰白色礫層。ほぼ平行に堆積するが南端では見られない。固く転圧を掛け、かなり固くなる。硬化面を形成。花崗岩を土止めとする路面か?。
16. 10YR6/1 褐灰色シルト質土、瓦・小石混じる。
17. 25YR7/6 明黄褐色シルト、熟田層ブロック。遺物なし。
18. 5Y5/1 灰色シルト、黄色ブロック(熟田層)混じる。遺物なし。
19. 5Y6/1 灰色シルト、黄色ブロック(熟田層)が多量に混じる。遺物なし。
20. 25Y5/1 黄灰色シルト、黄色ブロック(熟田層)がわずかに混じる。遺物なし。
21. 25Y4/1 黄灰色シルト、粘土、黄色ブロック多く含む。わずかに古瀬戸・丸窯製品の破・皿の小片(図中O)が1点出。
22. 25Y3/1 黒褐色シルト、自然堆積層。遺物なし。



23. 10YR3/4 暗褐色粘質土、白・茶色粘土ブロック混じる。
24. 10YR7/3 に近い黄褐色砂質土、白色砂土・小石・瓦混じる。
25. 25Y4/1 黄灰色シルト質土、瓦・小石・漆喰(白色)が多量に混じり固くなる。001SDをさる。
26. 25Y3/2 黒褐色シルト質土、わずかに漆喰・小石が混じる。001SDをさる。
27. 25Y5/1 黄灰色シルト質土、漆喰(ピンク色)・白土・小石・灰化物混じる。001SD埋土。
28. 25Y2/1 黒色粘質土、白色の漆喰ブロック多量に混じる。001SD埋土。
29. 25Y6/1 黄灰色砂質土、瓦、漆喰(白色・ピンク色)・煉瓦多量に混じる。001SDを構成する。ピンクの漆喰に伴う建築物を壊した後の埋土、中にはその部材と思われる大きなピンク色の漆喰の塊がみられる。
11. 75Y8/1 灰白色シルト質土、白色の漆喰ブロックからなる。それ以外には黒色土がわずかに入る。硬化面(路面?花崗岩より東に形成)の上にある。

図13 T-8平面図・土層図



1. 25Y4/4 オリーブ褐色砂質土、固くまる。
2. 25Y3/2 黒褐色粘質土、礫(2-5cm程度)多く含む、瓦含む、固くまる。
3. 10YR3/3 暗褐色やや粘質土、瓦含む、固くまる。
4. 25YR3/3 暗オリーブ色砂質土、白・黄・黒のシルトブロック多く含む、まだら状、固くまる。
5. 10YR3/4 暗褐色やや砂質土、白・黄・黒のシルトブロック多く含む、まだら状、固くまる。
6. 7.5YR5/6 明褐色砂質土、瓦含む。
7. 2.5YR3/3 暗オリーブ色砂質土、白・黄の粘土ブロック少量含む、固くまる。
8. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土、瓦含む。
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐色やや粘質土。
10. 10YR3/4 暗褐色砂質土、白・茶・黒のシルトブロック含む。
11. 10YR4/2 灰黄褐色やや粘質土、土層上面に10YR4/4褐色のシルト層あり。

図14 T-9平面図・土層図

(11) トレンチ9 (T-9 図14)

長辺が南北方向で、設定したトレンチの周辺の標高は13.6mから13.8mである。『御城二之丸図』(写真1)をみると、当地点は二之丸大手一之門跡の北に位置し番屋が所在した位置にあたる。『歩兵第六聯隊歴史』には面会所や馬繋所があったとされる。現在は歩兵第六連隊に関わる忠魂碑等の石碑が集中する場所でもある。

調査地点は周辺の地表より土盛りされている状況であり、礫、瓦、レンガ、ガラスともにプラスチック片が混入する表土は30cmから50cmと周辺より厚くみられた。表土を除去すると、標高13.0mから標高13.3mあたりまで瓦、レンガが混ざる2層、黒褐色粘質土層がみられ、層中には現代の製品はみられなかった。この層は近代以降の整地層であると思われる。この層を除去すると、3層の直上面、ほぼ標高13mで近代の遺構面を形成する。この面ではトレンチの東壁沿いに25cmから50cmの大きさの不定形の礫が3つ南北方向に並んで出土したため、その高さで慎重に検出を行ったが、その他の遺構を確認できなかった。これらの礫は周辺を整地した時に、レンガ、瓦に混ざって投棄されたものと思われる。さらに掘削を進めると、標高12.8mで20cmから30cmの礫が東壁沿いに集中してみられたため、その高さで全面検出をおこなったが、遺構は確認できなかった。最終的には地表下1.3m、標高で12.5mまで検出を繰り返しながら掘り下げたが明確な近世の遺構面を確認することはできず遺構も確認できなかった。

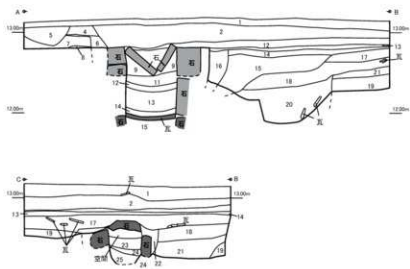
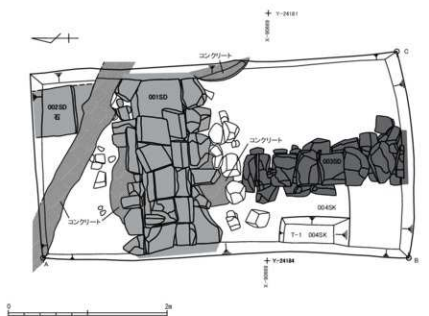
(12) トレンチ10 (T-10 図15)

二之丸西隅の遺構の確認を目的として、南北方向に長い2m×4mの調査区を設定した。『御城二之丸図』(写真1)によると、馬場の南西にあたり、陸軍期には銃工場付近の空地である。

地表高は13.1mから13.3mである。地表下10cmほどまで砂利混じりですまりのない砂質の表土が堆積し、その下に25cmほど、しまりのある砂質土が堆積する。さらにその下に瓦や小石が混じるやや粘質の土が20cmほど堆積している。

標高12.8mほどで東西に延びる溝(001SD)を検出した。加工された花崗岩の蓋を伴っていたが、大半が割れて溝内に落ちている状態で検出された。壁面は2段ないし3段の花崗岩の切石で、溝内の堆積土約80cmを除去したところ、溝底はモルタル(もしくは三和土か)であることが判明した。上層ではプラスチックやビニールなど現代のものを含むが、溝底では現代のものはみられず、近代以降のタイル(図19-55)が1点出土した。よって、001SDは近代以降のもので、ごく最近まで機能していたと考えられる。溝底のモルタルの下を一部掘削したところ、底部から10cm下のところが瓦敷きになっていた。瓦は棧瓦を転用したものと思われ、流水による削痕がみられた(図19-56)。001SDは東側で北に分岐しているが(002SD)、この分岐した場所より東がコンクリートによって切られている。このコンクリートは現代の鉄管に伴うものである。

001SDに切られる形で南北に延びる石組(003SD)を検出した。この石組は割石の蓋がなされた暗渠である。壁面は砂岩質の割石で底部に石などはみられなかった。蓋は割石で50cm角、厚さは約10cmである。幅は約40cm、深さは約40cmで、側面の石は内側が面取られている。側面の石積みは2段もしくは1段とみられる。003SDの内部から遺物は出土しなかったため、時期は不詳であるが、軒桟瓦を包含する近世の廃棄土坑(004SK)より新しく、001SDより古いもので、近世のものであると思われる。



- | | | | |
|---------------|-----------------------------------|--------------|--------------------------------|
| 1. 15Y5/1 | 灰色砂質、砂粒混じる。しまなし。 | 15. 7.5YR7/8 | 黄褐色砂質土。小石・砂を多量に含みやや粘性がある。 |
| 2. 10YR3/3 | 暗褐色砂質。小石・瓦混じる。ビニール混じる。 | 16. 7.5YR3/3 | 三和土がややわらくなつた。遺物なし。 |
| 3. 5.2N | 灰色砂質土層。小石・礫・ビニールがみられる。固くまる。 | 17. 10YR3/4 | 暗褐色砂質。小石混じる。しまあり。 |
| 4. 5Y5/1 | 灰色砂質。砂粒・コンクリート混じる。ややしまあり。 | 18. 10YR3/4 | 暗褐色やや粘質。小石混じる。しまあり。 |
| 5. 2.5Y7/4 | 浅黄褐色砂質。砂粒・茶のブロック土混じる。しまあり。 | 19. 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂質。白いシルト混じる。しまあり。近世盛土 |
| 6. 10YR4/2 | 灰黄褐色砂質。砂粒・ガラス・合成皮革混じる。しまあり。 | 20. 2.5Y3/2 | 黒褐色やや粘質。瓦含む。しまあり。 |
| 7. 2.5Y4/6 | オリブ褐色砂質。黒のブロック土・小石土混じる。しまあり。 | 21. 10YR2/3 | 黒褐色やや粘質。白いブロック土混じる。しまありややあり。 |
| 8. 2.5Y3/3 | 暗オリブ褐色砂質。小石混じる。しまあり。 | 22. 10YR2/3 | 黒褐色やや粘質。白のブロック土混じる。ややしまあり。 |
| 9. 10YR3/1 | 黒褐色やや粘質。しまなし。 | 23. 10YR2/3 | 003SDの掘り方。 |
| 10. 10YR2/2 | 黒褐色やや粘質。小石混じる。しまあり。 | 24. 10YR2/1 | 黒褐色やや粘質。しまなし。 |
| 11. 10YR1.7/1 | 黒色やや粘質。しまなし。 | 25. 10YR4/3 | 黒色粘質。しまあり。 |
| 12. N7/ | 灰色。壁域?コンクリート小石混じり。非常にかたい。 | | にぶい黄褐色やや粘質。灰色のシルトブロック混じる。しまあり。 |
| 13. 10Y4/1 | コンクリート壁域なのかは不明。 | | |
| 14. N4/ | 灰色砂礫層。礫(2~3cm程)と砂からなりかなり固くめられている。 | | |
| | 灰色粘質土。小石混じる。瓦を砕とる溝の堆積土か?遺物なし。 | | |

図15 T-10平面図・土層図

第3節 出土遺物 (図16～19)

試掘調査で出土した遺物は、1次調査で3箱、2次調査で25箱の合計28箱である。なお、T-4、5の遺物については実測に耐えうるものがなかった。

(1) T-1 (図16 1)

1は山茶碗である。胎土が細かく均質なことから東濃型¹⁸のものである。口縁部外面に被熱痕がみられる。中世の遺物が近代以降の層に紛れ込んだものである。

(2) T-2 (図16 2～14)

2～8は表土から出土した。2は陶器の碗である。陶胎染付で、外面には山水楼閣文を簡略化した文様が呉須で描かれている。近世の瀬戸美濃産のものである。3は陶器の土管で常滑のものである。丸瓦のように玉縁を持つ。内外面に黒く発色した軸葉が施されている。4は磁器の蓋である。表面には鶴と松と梅の文様が描かれている。鶴は2羽描かれているが、1羽は松に重なっている。近代の瀬戸美濃産のものである。5は陶器で急須もしくは土瓶と思われる。口縁部とその周辺、内側には軸葉はかけられておらず、肩部に鉄軸がかけられていることから、肩部から下に軸がかけられていたと考えられる。6は磁器の皿である。内面に籠の文様が描かれ、高台端部を除いて全体に薄い水色の軸葉がかけられている。全面に被熱の痕跡がみられ、器面が荒れている。内面には粘土目が残る。7、8はレンガ¹⁹で表土から出土した。7は赤褐色で焼成は良好である。胎土には2mm程度の白っぽい砂粒や黒色土が混じる。平の面にはナデ痕がみられる。刻印はない。8は赤褐色でひび割れがあり、焼成はやや不良である。レンガ全面にモルタルが薄く附着している。胎土には2mm程度の白色砂粒が少量混じる。明確な調整痕はモルタルのため不明である。

9～11は北西隅トレンチの001SKから出土した。9は土器の内耳鍋の口縁部である。口縁部と内面、外面下部にナデ痕がみられる。被熱痕はみられない。10は土器の鍋の口縁部で、胎土は緻密である。11は平瓦である。表面はいぶしがかかっている。側面には「○」の刻印がある。裏面には砂粒が附着している。

12は磁器の杯である。口縁部内面に上絵付で金の線描きが残っている。内面底部には同じく金の上絵付で「□つ房□陸山」と書かれている。口縁部に近いところにも一文字書かれているが、文字は判別できない。陸軍の顕彰杯と思われる。

13は軒丸瓦である。比較的小さい軒丸瓦で巴文と連珠文が施されている。巴文は左回りで尾部は次の巴頭部までみられる。頭部は直径9mm、連珠文は直径6mmである。瓦当部と丸瓦部の結合部分は刻み加工がされている。瓦当部と丸瓦部の表面にはいぶしがかかっている。

14は軒平瓦である。文様区には唐草文が施されている。唐草文の尾は次の唐草の半分ほどまでである。

(3) T-3 (図16 15)

15はレンガで表土から出土した。茶褐色で焼成は良好である。胎土には5mm程度の白色や黒色の砂粒が少量混じる。平の面にはナデ痕がみられ、小口にはモルタルが附着している。

(4) T-4、5

T-4、5から出土した遺物は、ほとんどが近代以降の遺物で、瓦・レンガ・ガラス等の小片が出土した。

(5) T-6 (図16、17 16~23)

16、17は表土から出土した。16は軒平瓦である。全体的に被熱痕がみられた。文様区には唐草文が施されている。17は平瓦である。裏面に滑り止めの溝が入れられていることから近代以降のものである。溝に接着剤と思われるものが付着している。

18、19は1層から出土したレンガである。18は赤褐色で焼成は良好である。胎土には8mm程度の小石や2mmから3mm程度の白っぽい砂粒、黒色土が混じる。ナデ痕がみられる。19は茶褐色で小口部分が剥がれやすく、長手にひびが入っており、焼成はやや不良である。胎土には1.4cm程度の小石や2mm程度の白っぽい砂粒や黒色土が混じる。平の面にナデ痕がみられ、そのうち1面にはモルタルの目地が多く残っている。

20から23は1層下部から出土した。20は磁器だが、器種は不明である。内側に白色釉がかかり、外側は無釉である。21は茶褐色のレンガである。焼成は良好である。2mm程度の白っぽい砂粒や黒色土が混じる。平にはナデ痕がみられ、そのうち1面には「力」の刻印がある。22は赤褐色のレンガで焼成は良好である。5mmから7mm程度の小石や2mm程度の白っぽい砂粒や黒色土が混じる。平の面にはナデ痕がみられ、長手のうち1面にモルタル塊が付着している。刻印はない。23は白色釉がかかるタイルである。裏面にモルタル塊が付着し、布目がみられる。また、「K.Y」のマークがある。『日本のタイル工業史』¹⁰⁾によると、昭和2年以降に名古屋市守山町(現名古屋守山区)の山田タイル製陶所(現KYタイル株式会社)で製造された硬質陶器タイルである。「K.Y」マークの横にある黒いスタンプは、メーカーや問屋が管理のために出荷日などをスタンプする例が多いとのこと¹¹⁾だが、これについては不明である。

(6) T-7 (図17、18 24~42)

24から28は表土から出土した。24は陶器の皿で近世の瀬戸の刷毛目皿である。高台端部以外の全面に灰釉が施されている。高台内以外の外面および内面底は灰釉の上に白黄泥を横方向に施している。同様のものは二之丸庭園でも出土している。25は陶器の皿である。高台端部以外の全面に灰釉が施されている。外面には横方向に刷毛目がみられる。内面には呉須で植物の葉のような文様が描かれている。26は陶器の鉢の口縁部である。全体に灰釉が施されている。胎土は24、25より茶色っぽく若干粗い。27は軒平瓦である。全体的にいぶしがかかっている。文様区に文様はない。28は板状であることから磚と考えられる。灰白色でいぶしがかかっていない。厚さは2.2cmである。側面に焼成前の径8mmの穿孔が1か所みられるが、欠損している面にかかっているため、半分しか残存していない。

29、30は2層上層検出中に出土した。29は土器である。火を受けた痕跡がみられ、外面が赤黒く瓦質土器のような質感であることから土風炉ではないと思われる。外面には菊文が施されており、近代以降の製品によくみられるモチーフである。2層からも接合はできなかったものの同一個体の可能性がある土器片が複数出土している。これらの中には、籠目文が施されているものや口縁部に雷文が描かれているものがある。30は須恵器の壺である。外面にタタキ痕がみられる。古墳時代から古代にかけてのものである。

31から33は2層検出中で出土した。31は瓦質の土器である。胎土は3mm程度の粒子を多く含み、粗い。底

部がわずかに残存している。火鉢や火消し壺などの類と思われる。32は平瓦である。側面には「○」の中に「小□」の刻印がある。33は棧瓦である。全体にいぶしがかかり、裏面には滑り止めの溝が刻まれている。側面には半分欠損しているが、「本」の刻印がある。

34から36は2層から出土した。34は山茶碗の体部である。東濃型山茶碗であるが、型式は不明である。35は陶器の蓋である。表面は鉄釉系の釉薬がかけられ、内面には肌色がかかった透明釉がかけられている。36は陶器である。器種は不明。無釉でススが付着している。

37は陶器の土管で常滑の角形半径土管（以下、半径管と略する。）である。底部が狭い逆台形で、全体に薄くマンガン釉がかかっている。長さ44.4cm、高さ8.0cm、上部幅の内寸9.1cm、底の内寸6.4cm、重さ2.6kgである。底部外面に離れ砂が付着している。T-7ではこの半径管を6つ南北方向に検出した。半径管内部からは瓦の小片が1,2点出土した。38は半径管の蓋である。鉄平石製のものと考えられ、半径管に被さって6つ検出した。長さ46.2cm、幅18.3cm、厚さ3.7cm、重さ4.7kgである。

39から42は調査区の西側埋土から出土した。39は陶器の甕で常滑のものである。内面にナデを施している。40は軒平瓦である。全体にいぶしがかかり、裏面には滑り止めの溝と径7mmの焼成前穿孔がみられる。文様区に文様はない。41は軒平瓦である。全体にいぶしがかかるが、裏面に滑り止めの溝はみられない。40と比べると瓦当部分が直線的でやや大きい。40と同様に文様はない。42は赤褐色のレンガで、焼成は良好である。2mm程度の白色砂粒が混じる。平にはナデ痕がみられる。他のレンガと違い、湾曲した形状をしており、建物がアーチ状に屈曲した部分に使われていたものと考えられる。

(7) T-8 (図18 43~45)

43~45は表土から出土した。43は磁器のガイシである。ガイシの中心に孔が開いており、ネジを通して取り付け、上部のくびれに電線を巻いて電線を支えるノブガイシと呼ばれるものである。底部と穿孔の下部以外は白色釉が施されている。同様のガイシは二之丸庭園でも出土している。44は軒丸瓦である。巴文と連珠文がみられる。巴は右回りで尾部は次の尾部の中ほどまでである。瓦当部の直径は約17.1cmで、表面にはいぶしがかかっている。45は茶褐色のレンガで、内部に行くにつれて赤みがかかった焼成となり、焼きムラがみられる。また、ひびが入っており、焼成は不良である。3mm程度の白色砂粒が多く混じる。平にはナデ痕がみられる。長手の両面には目地にモルタルが使用されている。そのうち1面にはモルタル目地とともに別のレンガの一部が付着している。

また、小片のため実測図は掲載していないが、T-8の西壁黒色土層からは大窯の灰釉陶器端反皿の口縁が出土した（図13のa）。

(8) T-9 (図18 46)

46は表土から出土した金属製の大型釘である。長さが24.7cmで断面は四角である。釘の頭部は直角に折れ曲がっている。

(9) T-10 (図19 47~59)

47~52は表土から出土した。47は陶器である。外面には横方向に沈線が入り、内面にはナデ痕がみられ

る。朱泥で急須の取手ではないかと思われる。48は陶器で樽の底部と考えられる。全体に透明釉がかけられ、底部と側面および内面の一部にウノフ釉が施されている。49は磁器の皿である。高台内に「東陶」銘のスタンプが入っている。50は磁器の蓋である。取手端部以外は白色釉がかけられ、コバルトで文様が描かれている。取手内部に「千□□製」とある。51は銅製の製品だが、器種は不明である。断面は円形で、頭部はカーブし、先端は平たく、隅丸方形の穿孔がみられる。52は陶器の瀬戸美濃産描鉢で外面に鉄釉、内面に錆釉がかけられている。外面はやや湾曲している。

53から56は東西に延びる001SDから出土した。53は磁器の碗である。平碗で銅板すり絵による文様が施されていることから明治20年代以降のものと考えられる¹²。54は軒椀瓦の瓦当部である。巴文と連珠文がみられる。巴文は左回りで、瓦当径は8.5cm、巴文の頭部と連珠文は直径約8mmである。表面の剥離痕から、椀が向かって右側にある左椀瓦と考えられる。55はタイルで001SD底の三和土（もしくはモルタル）の直上から出土した。25cm角の正方形で厚さは5mmである。表面に淡い水色の釉薬がかけられ、裏面には凸線が5本入っている。「磁器モザイク」と呼ばれるもので、昭和8年に伊奈製陶株式会社（現株式会社LIXIL）で製造され始めた。当初は無釉であったが、戦前までには施釉されるようになった。ガラス質で白っぽい胎土と裏面の凸線状の平行線は初期の磁器モザイクの特色で、現在この磁器モザイクは製造されていないとのことである¹³。現在のタイルは、より灰色がかった胎土で、裏面は凹線になっているとのことである。001SDからはビニールやプラスチックが出土し、現代まで使用されていたようだが、001SDの底からこのタイルが出土したことから、001SDは少なくとも陸軍期まで遡る可能性がでてきた。56は平瓦である。001SDの下層の溝から出土した。56は表面に一定方向に削痕があり、削痕は東西方向にみられ、溝底にあるため溝に水が流れた際に流出する土砂によって浸食された痕跡であると思われる。瓦当部を取り除いた痕跡があるため、軒椀瓦を溝の底に転用したのと考えられる。表面にはいぶしがかかっている。平瓦はちょうど001SDの溝底と同じくらいの幅だが、001SDに先行する溝の一部が001SDの底を補強するものであるかは判断できなかった。

57は003SDから出土した板状の瓦で樽と考えられる。厚さは1.8cmで表面から裏面に向かって焼成前穿孔がみられる。表面にはいぶしがかかっており、表面にも一部いぶしがみられる。

58は軒椀瓦である。瓦溜りの004SKから出土した。瓦当径は8.6cmで54の瓦当部とほぼ同じ大きさだが、文様線の直径が54より大きい、巴文も大きい。連珠文の大きさはほぼ同じである。瓦当部にいぶしがかかっている。また、椀瓦の結合部にはナデがみられる。

59は陶器の碗である。端反碗で、白泥化粧の上に透明釉がかけられていたようだが、口縁部と内外面の一部に残るのみで、ほとんど剥がれてしまっている。口縁端部には鉄釉が残る。

(10) 出土遺物のまとめ

二之丸地区第1次・第2次試掘調査で出土した遺物のほとんどは近代以降のものである。その傾向は二之丸庭園の調査でも同様な状況であった¹⁴。出土遺物に近世の遺物が少ないのは、調査地点が二之丸という日常的な消費活動から切り離された地区であるためと、調査の目的が近世の遺構面の確認であり、原則、近世の遺構を掘削する機会がないためである。

そうした状況の中で今回の調査で特に目立ったものがレンガであり、T-9を除くトレンチで出土した。

その中で実測に耐えうるものが9点（図16-7,8,15,18,19,図17-22,21,図18-42,45）で計測に耐えうる出土点数は40点を数え、特にT-2で19点、T-6で10点と、この2つのトレンチに集中してレンガがみられた。レンガは近代の建造物を構成する代表的な素材であり、多くの明治、大正時代の建造物に用いられ、近年、横浜の外国人居留地¹³⁵、山陽線姫路駅構内の調査¹³⁶等、全国各地の立会調査や発掘調査によって近代を特徴付ける遺物として注目されている。二之丸地区の各トレンチで出土したレンガは名古屋城に駐屯していた第六連隊に関わる建造物に使用されたものであることは疑いなく、陸軍施設の築造または改修された時期を考えるのに有効な資料となり得る。出土したレンガをみると、そのほとんどが小口、長手の面は調整の痕跡が特に顕著ではないが、上下の平の面には1点（T-4、出土、図なし）を除くと、一様に平の面の一方の短辺から対する短辺に一方へハケ状工具で1度になでた痕跡がみられ、明らかに現在、流通しているレンガの調整とは異なる。この調整は明治20年代以前のレンガにみられ、型押し形成したレンガの平の面を一個一個、板ナデした際に施されたものである。明治20年代以降には機械による成形法が全国的に一般化していき、平にみられたナデ痕に代わってピアノ線によって切り離される痕跡がみられるようになる¹³⁷。出土したレンガの規格をみると、大正14年（1925）に全国的に規格化されたJES（現在のJIS）規格のサイズ（長さ210mm、幅100mm、厚さ60mm）より、幅が長く厚さが薄いものが目立った。幅が100mm以上あるもので厚さが60mm以内のものが半数以上みられ、長さも210mmを超えるものがみられた¹³⁸。また中には刻印があるものがみられ、今回の調査で確認した刻印は角印内に「カ」とあるもの（図17-21）のみであるが、これは過去の発掘調査の例やレンガ研究者の集成資料¹³⁹にないものである。愛知県内でレンガが焼成され始めるのは明治10年代の後半からであるといわれている¹⁴⁰。このことから今回の調査で確認したレンガは、明治10年代後半以降に県内で焼成されたものである可能性がでてきた。但し、京浜、阪神などの他地域から搬入されることも考慮すべき点である。『歩兵第六聯隊歴史』には連隊本部や兵舎が建造されたのは明治7年（1874）頃とある。特に兵舎はレンガ造りであることが明記されていて、出土したレンガに兵舎のものが含まれている可能性は高い。また他地域をみる¹⁴¹と、建造地の周辺の瓦窯で焼成している例もあり、近隣の瓦窯で焼成された可能性も捨てきれない。今後の検討課題である。

レンガ以外には瓦も多数出土しており、その多くは出土層位、特徴等からレンガ同様、近代のものである。特にT-8では被熱の痕がみられるものが多くみられ、トレンチのほぼ中央を南北に走る001SDより西側でみられた4層中から、焼土、被熱により桃色に変色した漆喰の塊と共に多く出土した。T-8周辺には第六連隊関連の本部があり、本部は明治9年（1876）に焼失し立て直したという¹⁴²。これらは火災後に廃棄された遺物の一群の可能性もある。

注1 『新修名古屋市史』資料編 考古2 新修名古屋市史資料編編集委員会編 2013

注2 調査成果は「名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第1次（2013）～第3次（2015）」名古屋市長 2017
「名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次～第6次」名古屋市長2020にまとめている。

注3 『歩兵第六聯隊歴史』歩六史編集委員会 1968

注4 注3と同

注5 注3と同

注6 注3と同

注7 『特別展 土管の歴史展～飛鳥から現代まで～』常滑市民俗資料館 1994

- 注8 東濃型山茶碗は、東濃窯を中心に瀬戸窯の一部、恵那・中津川窯や恵南窯などで焼成された。粒子が緻密で均一な胎土で、時代が下るにつれより薄手に製作されるようになる。
- 注9 直方体が基本で、一番広い面を「平」、長辺側の側面を「長手」、短辺の側面を「小口」と呼ぶ。
- 注10 「日本のタイル工業史」株式会社INAX、日本のタイル工業史編集委員会 1991
- 注11 INAXライブミュージアム主任学芸員後藤泰男氏のご教示による。
- 注12 「せともの百年史—中部地方出土の近代陶磁 瀬戸・美濃窯の近代3—」瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2009
- 注13 INAXライブミュージアム主任学芸員後藤泰男氏のご教示による。
- 注14 「名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次～第6次」名古屋市 2020
- 注15 「横浜都市発展記念館 資料調査報告 横浜の近代考古資料」横浜都市発展記念館 2018
- 注16 「豆腐町発掘調査報告書1」兵庫県教育委員会 2007
- 注17 「日本煉瓦史の研究」水野信太郎 2013
- 注18 ここでは便宜的に「長さ」は長手と平の長辺のことで、「幅」は小口の長辺、平の短辺のことで、「厚さ」は小口と長手の短辺を指す。
- 注19 注17と同じ
- 注20 注17によると愛知県内では、レンガが焼成されるのは明治11年（1878）、常滑の金島窯からであり、明治15年頃には東洋組が刈谷や西尾でレンガを焼成し始めている。のち東洋組の技術は西三河を中心としたレンガ製造業社に受け継がれ、明治10年代後半から30年代にかけて、天工会社、精成社、刈谷就産所、平坂煉瓦、大野煉瓦等の多くの製造業社が誕生した。
- 注21 注17によると、大阪造幣寮は明治元年（1868）に起工されたレンガ建物であるが、明石や堺の瓦屋にレンガ焼成させ最終的に環の瓦屋のものを用いたという。同様な例は長崎の例も紹介されている。
- 注22 注3と同一

参考文献

- 「愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系」愛知県史編さん委員会 2007
- 「ものと人間の文化史 100・瓦」森郁夫 2001
- 「瓦が語る日本史 中世寺院から近世城郭まで」山崎信二 2012
- 「横浜都市発展記念館資料調査報告 横浜の近代考古資料」横浜発展記念館 2018

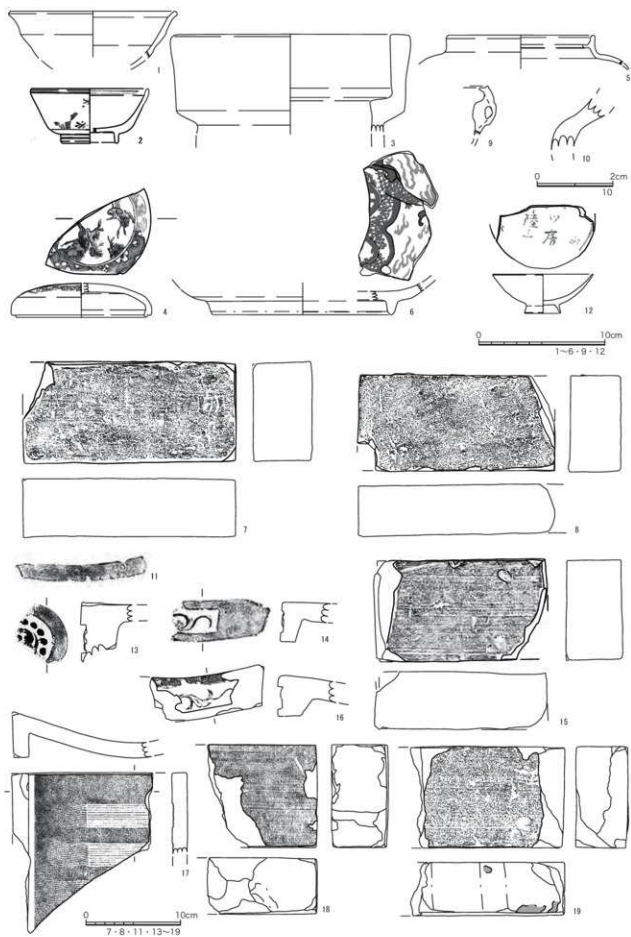


图16 T-1 (1)、T-2 (2~14)、T-3 (15)、T-6 (16~19) 出土遺物

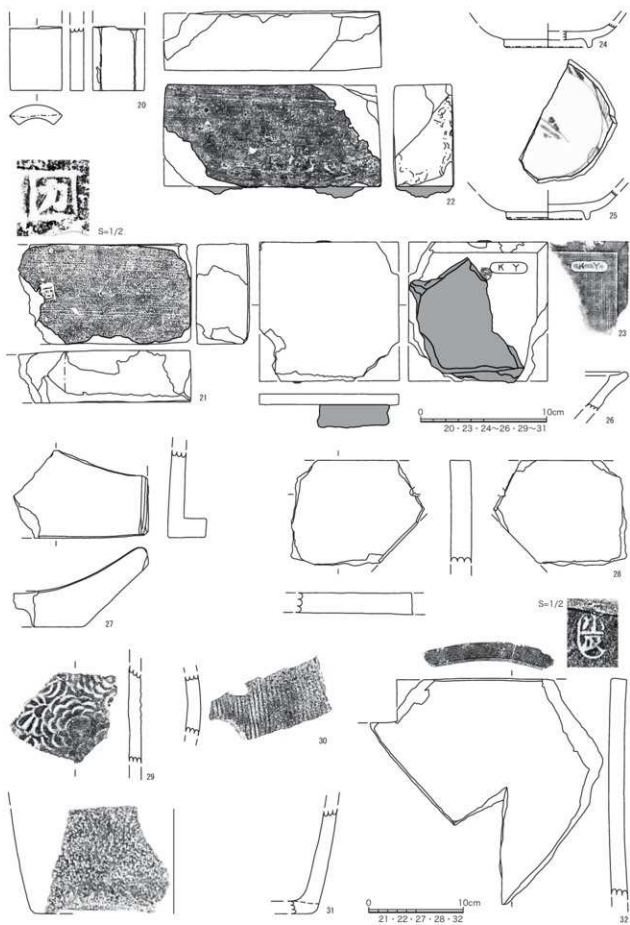


图17 T-6 (20~23)、T-7 (24~32) 出土遺物



图18 T-7 (33~42)、T-8 (43~45)、T-9 (46) 出土遺物

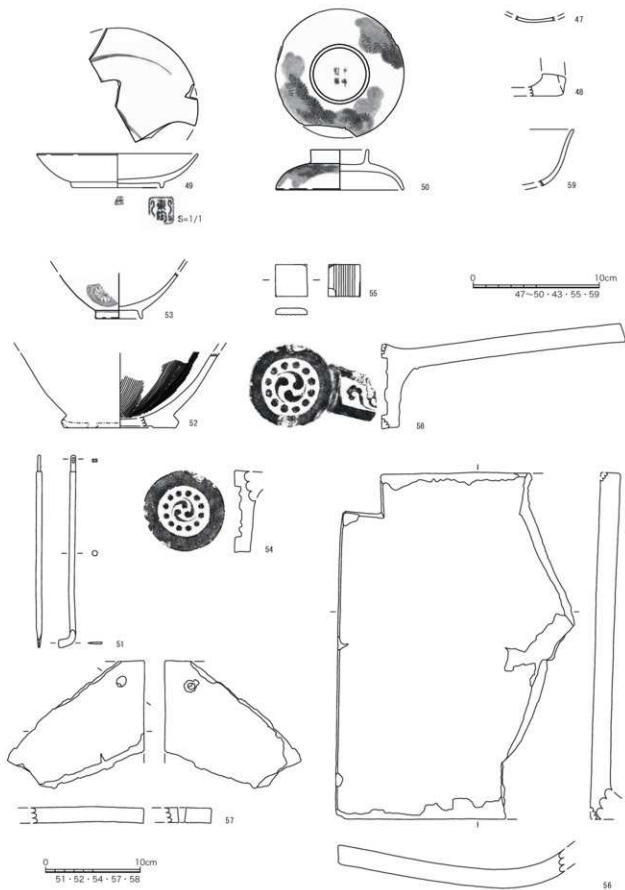


图19 T-10 (47~59)

図版番号	写真図版番号	調査年次	出土地点	遺構	材質	器種	流量 (cm)			特記事項	
							口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)		
1	—	1次	T-1	3層	陶器	山茶碗	(13.4)	—	(3.7)	東濠型	
2	—	1次	T-2	表土	陶器	碗	9.0	4.2	4.3	陶輪捺付 山水様文の省略文様	
3	14	1次	T-2	表土	陶器	土管	20.2	14.6	7.9	マンガン釉	
4	15	1次	T-2	表土	磁器	蓋	11.0	—	—	2.7	
5	—	1次	T-2	表土	陶器	急須か	(11.0)	—	—	(2.8)	
6	16	1次	T-2	表土	磁器	皿	—	—	14.0	(2.5)	
7	17	1次	T-2	表土	レンガ	レンガ	22.4	10.4	—	6.2	
8	18	1次	T-2	表土	レンガ	レンガ	20.8	10.1	—	5.5	
9	—	1次	T-2	北西隅トレンチ001SK	土器	内耳鍋	—	—	—	(8.8)	
10	—	1次	T-2	北西隅トレンチ001SK	土器	鍋	—	—	—	(1.4)	
11	—	1次	T-2	北西隅トレンチ001SK	瓦	平瓦	—	—	—	—	
12	—	1次	T-2	4層	磁器	杯	8.2	3.2	—	3.1	全文字で「■ツ房■陸山」
13	—	1次	T-2	4層	瓦	軒丸瓦	5.4	9.7	—	6.0	斜み加工あり 瓦当径7.6cm 瓦当厚0.9cm
14	19	1次	T-2	5層	瓦	軒平瓦	5.3	11.3	—	9.1	唐草文
15	25	1次	T-3	表土	レンガ	レンガ	10.8	6.1	—	18.2	—
16	—	2次	T-6	表土	瓦	軒平瓦	16.2	12.4	—	厚さ2.1	—
17	—	2次	T-6	表土	瓦	平瓦	17.0	15.0	—	厚さ1.6	—
18	—	2次	T-6	1層	レンガ	レンガ	11.6	10.9	—	5.8	—
19	21	2次	T-6	1層	レンガ	レンガ	16.4	10.8	—	5.3	—
20	22	2次	T-6	1層下部	磁器	不明	5.1	4.1	—	厚さ1.1	—
21	23,24	2次	T-6	1層下部	レンガ	レンガ	18.3	10.6	—	5.5	「力」印あり
22	—	2次	T-6	1層下部	レンガ	レンガ	23.1	11.7	—	6.4	モルタル目地小石置じり
23	26,27	2次	T-6	1層下部	磁器	タイル	11.1	11.1	—	厚さ0.9	K Y/TILE銘あり モルタル付着
24	—	2次	T-7	表土	陶器	皿	—	—	6.5	1.9	刷毛目置 (瀬戸)
25	—	2次	T-7	表土	陶器	皿	—	—	6.2	2.3	—
26	—	2次	T-7	表土	陶器	鉢	—	—	—	3.1	—
27	25	2次	T-7	表土	瓦	軒平瓦	9.2	14.3	—	厚さ1.6	—
28	—	2次	T-7	表土	瓦	埴	14.2	13.1	—	厚さ2.2	—
29	—	2次	T-7	2層上層検出中	土器	風丸か	—	—	—	—	瓦質土器
30	—	2次	T-7	2層上層検出中	須恵器	壺	—	—	—	—	—
31	—	2次	T-7	2層検出中	土器	火鉢か	—	22.0	—	3.4	瓦質土器
32	—	2次	T-7	2層検出中	瓦	平瓦	24.0	24.7	—	厚さ1.7	刷印あり
33	—	2次	T-7	2層検出中	瓦	椀瓦	24.5	22.8	—	厚さ1.4	刷印あり
34	—	2次	T-7	2層	陶器	山茶碗	—	—	—	2.6	東濠型
35	29	2次	T-7	2層	陶器	蓋	4.5	—	—	2.5	器大径7.0cm つまみ径1.2cm 赤っぽい鉄線系の釉薬
36	—	2次	T-7	2層	陶器	不明	—	—	—	4.9	—
37	36	2次	T-7	土管	陶器	角形半径土管	—	—	—	—	常滑 管内部から瓦の小片出土
38	37	2次	T-7	土管	石	半径土管の蓋	—	—	—	—	鉄平石
39	—	2次	T-7	石列 (土管) 西側埋土中	陶器	壺	—	—	—	13.7	常滑
40	30	2次	T-7	石列 (土管) 西側埋土中	瓦	軒平瓦	16.7	16.2	—	厚さ2.1	焼成前穿孔あり
41	31	2次	T-7	石列 (土管) 西側埋土中	瓦	軒平瓦	19.5	25.9	—	1.8	—
42	32	2次	T-7	石列 (土管) 西側埋土中	レンガ	レンガ	5.9	9.7	—	6.0	—
43	28	2次	T-8	表土	磁器	ガイシ	3.5	3.4	—	5.0	ノップガイシ 孔径0.8cm
44	33	2次	T-8	表土	瓦	軒丸瓦	3.9	17.2	—	厚さ2.3	瓦当径17.2cm 文様区径12.4cm
45	34	2次	T-8	表土	レンガ	レンガ	21.3	9.8	—	6.0	—
46	35	2次	T-9	表土	金属	大形釘	24.7	1.0	—	厚さ0.9	—
47	—	2次	T-10	表土	陶器	急須	—	—	—	—	朱塗 注口か把手
48	—	2次	T-10	表土	陶器	樽の底部か	—	—	—	厚さ1.8	注口付きの桶状の鉢
49	—	2次	T-10	表土	磁器	皿か	12.8	7.0	—	2.7	「東陶」銘あり
50	38	2次	T-10	表土	磁器	蓋	10.0	—	—	3.2	横み径4.5cm 「千輪園製」銘あり
51	39	2次	T-10	表土	金属	不明	20.4	—	—	—	直径0.6 直径0.6cm
52	40	2次	T-10	石溝検出	陶器	撞鉢	—	11.8	—	7.9	—
53	—	2次	T-10	SD1 (東西溝) 埋土	磁器	碗	—	—	—	3.6	3.7
54	41	2次	T-10	SD1 (東西溝) 埋土	瓦	軒丸瓦 (瓦当部のみ)	2.2	8.7	—	厚さ1.7	瓦当径8.7cm 文様区径5.5cm
55	42	2次	T-10	SD1底	磁器	タイル	2.6	2.6	—	0.6	—
56	43	2次	T-10	SD1下 溝	瓦	平瓦	36.6	25.0	—	厚さ2.0	—
57	—	2次	T-10	SD3埋土中	瓦	埴	13.6	14.5	—	厚さ1.6	焼成前穿孔あり 孔径0.9cm
58	—	2次	T-10	SK4	瓦	軒丸瓦	25.8	13.5	—	厚さ2.0	瓦当径9.0cm 文様区径7.2cm
59	—	2次	T-10	西壁サブトレ埋土	陶器	碗	—	—	—	4.5	陶反碗 白泥 透明釉 口縁端部は鉄釉

表4 遺物観察表

第4章 総括

第1次、第2次の試掘調査で二之丸地区の地下遺構の状況を確認した。次頁の表5は調査結果の概要をまとめたものである。調査した10地点のトレンチで、近世の遺構、遺構面を確認できたのはT-2からT-5、T-10の5地点であり、近代の遺構面、遺構を確認できたのは、T-2からT-5、T-7からT-10の8地点である。近世、近代の遺構面、遺構共々、確認できなかったのは近代以降の改変を受けたT-1とT-6であった。両トレンチが所在する二之丸広場は、名古屋市教育委員会が実施した過去の調査¹⁸¹でも地表下1.6mまでは近代以降の遺物が混入する層によって占められることから、この地区は近代以降に大きく整地されている可能性が高い。T-1周辺では戦後、名古屋大学の建物として利用されていた陸軍の建物等が、昭和37（1962）年名古屋大学の本山への移転に伴い取り壊されている。このトレンチから出土した遺物は大学移転に伴う遺物の可能性が高い。

表5にあるように、特に県体育館の北の駐車場から二之丸東一之門北側の地区については近代、近世の遺構面が良好な状態で残存している。近世においてこの地域は二之丸御殿の南にあたり、T-3では建物の礎石を確認している。『御城二之丸図』（写真1）を見ると、奥向きの「局」の一角を占められると思われる。また、県体育館の南西隅に当たるT-10では『御城二之丸図』（写真1）にはない石組の溝が確認された。検出された地点から二之丸の南にあった馬場周辺の排水関連の施設である可能性がある。

また、県体育館周辺のT-2からT-5、T-8で整地層を確認できた。確認された整地層からは少量の瓦が出土しているが、形成された時期の詳細は不明である。T-3でのピットを伴う礎石の検出面を形成する土層は、瓦を少量含み地山ブロックが入る層であり、名古屋城内で瓦が顕著にみられるのが近世以降であることを考えると、この層は二之丸の整備に伴う整地層である可能性がでてくる。またT-8では2回にわたる整地が確認されており、これらの整地をどうとらえるか、考えていく必要がある。

以上のことから、現況では二之丸広場を除く県体育館の周辺では近世の遺構、遺構面の残りは比較的に良好であり、県体育館の北側、特に駐車場のある二之丸御殿の敷地の南側にあたる地点では、御殿関連の遺構が良好な状態で残存している可能性が高い。二之丸地区の南に存在していた馬場そのものの遺構を確認することは出来なかったが、それに関連する排水用であろう暗渠遺構が検出されている。

近代の遺構に関しては、表5にあるように、歩兵第六連隊に伴う兵舎、厩、連隊本部等の施設に関わる遺構を検出できた。また遺物のところで触れたように、この調査で多くのレンガが出土している。現時点ではレンガ個体の特徴や建築の専門家の研究からは明治10年代中頃以降である年代観が考えられるが、『歩兵第六聯隊歴史』の兵舎造営年代と齟齬があり、この調査で出土したレンガの供給元はどこであるか、また焼成年代の検討が必要である。

付記

第2次調査が完了した後、令和元年11月に県体育館の北西にある忠魂碑前の石敷きの通路、T-9の北東に位置する箇所(図20 A)で、数日来的大雨によって石畳の一部が陥没した。陥没した箇所の土砂を取り除くと、石敷きの通路の下に花崗岩の蓋石を伴う石組の暗渠を確認した。暗渠は現況で幅約80cm、暗渠内の高さは約80cmで側面は割石を4段積みしていた。暗渠は陥没地点から東西にのび、東方は陥没土によって半ば埋まっており延長部の状況は不明であった。暗渠は陥没地点より北に分岐していたが、分岐点から北に約15mの地点で埋没していた。西方は15mほどで暗渠は北に折れており、延長は本丸表二之門を出た東にある堀にある石樋(図20 B地点)に続いていると思われる。崩落の危険性もあり暗渠底の状態は確認できず、堆積土の状況を見ると、現在も大雨の時など不定期的に水が流れていることが判った。後日、緑政土木局が行ったケーブルカメラの調査の際に、堆積土中に近代の銅板刷りの瀬戸美濃の磁器を確認した。暗渠は二之丸庭園の東広場の北に露出展示されている近世の暗渠や名古屋市教育委員会が調査した二之丸庭園の概要報告書¹³⁾で報告されている南池の南で確認された近世の暗渠と形状が類似していることから、近世に構築された可能性がある。『御城二之丸図』(写真1)にある「馬場小路」と「向屋敷」の境とされている県体育館の北辺のラインの延長上に暗渠があたることから、両者の境界の溝になる可能性がある。なお、当該地点は緑政土木局によって陥没地点は土糞を詰めたのちに埋め戻し、周辺を通行止めとする応急処置が行われた。

トレンチ名	近代遺構面	近代の遺構	遺構面の高さ	近世遺構面	近世の遺構	遺構面標高(m)	備考
T-1	—	—	—	—	—	—	名古屋大学関連の建物の廃棄土坑の可能性がある
T-2	○	—	13.3	○	土坑、溝	13.0	
T-3	○	—	13.1	○	礎石と礎石を土坑	13.0	
T-4	○	兵舎関連の石列	12.9	○		12.8	遺構は検出していないが、近世の遺構面を確認
T-5	○	コンクリート基礎	13.0	—	土坑	12.9	近世の遺構面は現代の攪乱坑によって喪失。わずかに攪乱坑の底に遺構を検出
T-6	—	—	—	—	—	—	最下層まで近代以降の遺物が出土
T-7	○	石蓋を伴う半径土管	12.7	—	—	—	
T-8	○	建物の壁の一部、溝	13.0	—	—	12.9	近世の整地層らしきものを確認(左の標高は整地面の上面の高さ)
T-9	○	—	13.0	—	—	—	西壁断面図のみで近世の遺構面確認
T-10	○	石組暗渠	12.8	○	石組暗渠、土坑	12.7	

表5 各トレンチの概要(○は検出できたことを示し、—は確認できなかったことを示す)

注1 名古屋市教育委員会によって立会調査が2005年に行われている。

注2 「名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書」 名古屋市教育委員会 1976

参考文献 「日本名城集成 名古屋城」小学館 1990

「歩兵第六聯隊歴史」歩六史刊行会事務局 1968

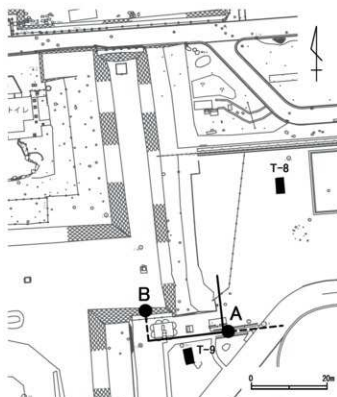


図20 緑政土木局の調査で確認された暗渠

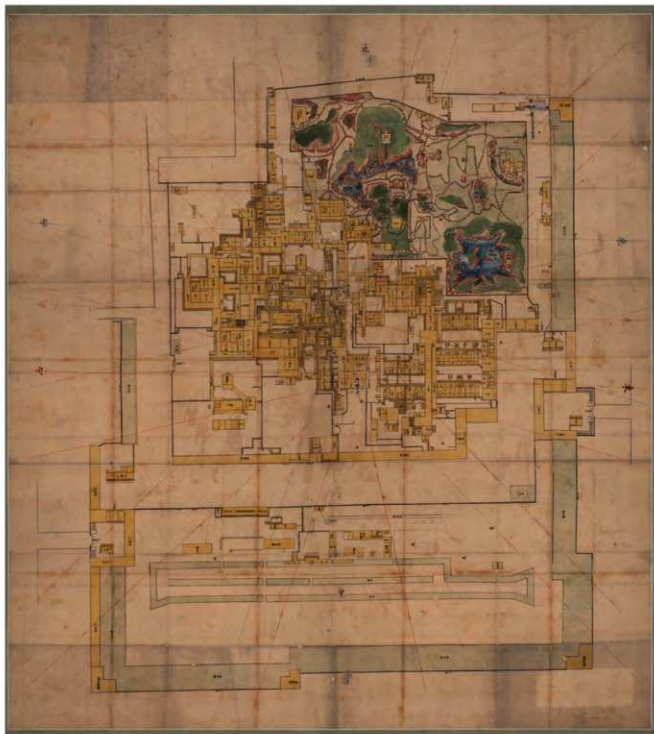


写真1 『御城二之丸図』(名古屋城総合事務所 蔵)



写真2 T-3 完掘 北から



写真3 T-4 完掘 東から



写真4 T-7 完掘 南から



写真5 T-8 完掘 北東から



写真6 T-10 完掘 南より



写真7 T-7 出土 蓋石と角形半径土管



写真8 T-1 完掘 東から



写真9 T-2 完掘 東から



写真10 T-5 完掘 北西から



写真11 T-6 完掘 東から



写真12 T-9 完掘 南から



写真13 T-10 001SD 石蓋陥没状況 東から



写真14 (图16-3)



写真15 (图16-4)



写真16 (图16-6)



写真17 (图16-7)



写真18 (图16-8)



写真19 (图16-14)



写真20 (图16-15)



写真21 (图16-19)



写真22 (图17-20)



写真23 (图17-21)



写真24 (图17-21、刻印)



写真25 (图17-27)



写真26 (图17-23)



写真27 (图17-23、裏面)



写真28 (图18-43)



写真29 (图18-35)



写真30 (图18-40)



写真31 (图18-41)



写真32 (图18-42)

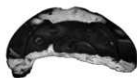


写真33 (图18-44)



写真34 (图18-45)



写真35 (图18-46)



写真36 (图18-37)



写真37 (图18-38)



写真38 (図19-50)



写真39 (図19-51)



写真40 (図19-52)



写真41 (図19-54)



写真42 (図19-55)



写真43 (図19-56)

報告書抄録

ふりがな	なごやじょうにのまるちくしくつちょうさほうこくしょ							
書名	名古屋城二之丸地区試掘調査報告書							
副書名	第1次・第2次調査							
シリーズ名	名古屋城調査研究報告2 埋蔵文化財調査報告2							
編著者名	花木ゆき乃・高橋圭也・佐藤公保							
発行機関	名古屋市観光文化交流局 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター							
所在地	〒460-0031 愛知県名古屋市中区本丸1番1号 TEL 052-231-2481							
資料の保管機関	名古屋市観光文化交流局 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター							
発行年月日	2021（令和3年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくべつしせき 特別史跡 なごやじょう 名古屋城 にのまる 二之丸	あいちけん 愛知県 なごやしちゆうく 名古屋市中区 にのまる 二の丸2番	23100	市遺跡番号 7-1 県遺跡番号 007001	35°10'56" ～ 35°11'09"	136°54'03" ～ 136°54'13"	2020/1/28～ 2/28 2020/9/6～ 9/20	80㎡	史跡 整備
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
名古屋城跡	城跡	近世・近代		土坑・溝・ 建物基礎		近世陶磁器・瓦・ レンガ・タイル等		—
要約	本試掘調査によって、特別史跡名古屋城跡の未告示地区である名古屋城二之丸地区には断片的ではあるが、近世の遺構、生活面が残存していることが判明した。あわせて近代、歩兵第六連隊関連の遺構も残存していることが判った。							

名古屋城調査研究報告2
埋蔵文化財調査報告書2

名古屋城二之丸地区試掘調査報告書

第1次・第2次調査

令和3年3月31日

編集・発行 名古屋市観光文化交流局
名古屋城総合事務所
名古屋城調査研究センター

印 刷 西濃印刷株式会社